

埼玉県大里郡川本町大字瀬山地内

瀬山遺跡群発掘調査報告書

— 大門遺跡、玉性寺跡、道祖神遺跡・塚 —

1991

埼玉県大里郡川本町教育委員会

埼玉県大里郡川本町大字瀬山地内

瀬山遺跡群発掘調査報告書

—大門遺跡、玉性寺跡、道祖神遺跡・塚—

1991

埼玉県大里郡川本町教育委員会

序

川本町瀬山遺跡の発掘調査の結果を、ここに報告いたします。

瀬山地区は、その南側に隣接する明戸地区とともに、川本町北地区（町域の荒川左岸部）の東端に位置して熊谷市西部地区に接しております。行政区画のうえからは川本町に属するとは申しながら、地形的には西に隣り合っている町内の長在家との間は、瞭然とした段丘崖（ハケ）をもって一線を画し、これより東に展開する熊谷市につづく荒川左岸の沖積層上にあります。このことが、本調査の端緒となった熊谷西部土地改良事業の対象地域として、行政区画を超えて瀬山地区が加えられた大きな理由となっております。

川本町における遺跡は、これまで荒川の右岸（南地区）の江南台地およびその北側の下位段丘上に数多くみられ、舟山遺跡をはじめ、箱崎古墳群、塚原古墳群、鹿島古墳群、上本田遺跡、焼谷遺跡、権現堂遺跡、川端遺跡、白草遺跡、竹ノ花遺跡、山ノ腰遺跡、島山蛇跡等かず多く発見・調査がおこなわれているのに対し、荒川の左岸（北地区）においては顯著なものとして上原経塚や見目古墳群が知られている程度で、遺跡の存在もあまり明らかではありませんでした。しかしながら、今回の瀬山遺跡およびほぼ同期をしておこなわれました上原地区的沢口遺跡の調査によりまして從来空白でありました部分を補うことができ、川本町の歴史に新しい頁を書き加えることが出来るようになりました。町民にとりましては、大きな喜びであります。

さらに重要なことは、南北両地区における遺跡がいずれも江南台地あるいは荒川が開拓した荒川扇状地の下位段丘上に分布しているのに対し、瀬山遺跡はこれらより一段低い沖積層の荒川新規扇状地上に位置していることであります。この層からの出土物としては、昭和初期に明戸地区において藏骨器や五輪塔の破片（15～16世紀）が出土した例がありますが、これらと共に瀬山遺跡は、これまで発見・調査された町内の遺跡との比較や、同じように荒川沖積層の上にある熊谷市の遺跡などとの関連を解明する上で、貴重な役割をもつ数少ない遺跡と申せましょう。

いろいろな意味でこの報告書が、各方面的皆様のお役に立てば幸いに思います。

平成3年3月

川本町教育委員会教育長 小久保 忠 克

例　　言

- 1 本書は、埼玉県大里郡川本町大字瀬山に所在する大門遺跡、玉性寺跡、道祖神遺跡・塚の発掘報告書である。
- 2 発掘の原団は、県営圃場整備（熊谷西部地区）である。
- 3 発掘調査は平成元年度事業として、整理報告書刊行は平成2年度事業として実施した。調査経費は、大門遺跡が国及び県の補助事業により、玉性寺跡、道祖神遺跡・塚は深谷土地改良事務所の委託金を受け実施した。
- 4 発掘調査は川本町教育委員会が主体となり実施し、発掘担当・本書の執筆・編集は村松篤が行った。
- 5 発掘調査から本書作成に至る過程で、次の諸氏から種々のご指導、ご指示を頂いた。
新井端、今井宏、金子正之、栗原文藏、小久保隆福、田尻高樹、鳥羽正之、馬場平三郎、中島道

- 6 発掘調査及び整理作業の参加者は、以下の通りである。

発掘調査 石川勝美、志村福亀知、小久保新三、小久保正巳、馬場敬次、藤野文助、小久保忠久、
小久保花子、小久保よね、小菅勲子、清水キヌ、中島民子、中島好子、馬場いそ、
馬場トメ、馬場尚江、馬場弥生、馬場ゆう、藤野ナカ
整理作業 河野朋子、小久保花子、柴崎朝子、田島靖子、田尻とみ子、前原道子、森田節子、
山田幸子、吉沢邦子

目 次

序

例 言

目 次

挿 図 目 次

I	発掘調査に至る経過	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	発掘調査の工程と概要	1
II	遺跡群の立地と環境	3
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	3
III	大門遺跡の調査	6
1	東地区の遺構と遺物	6
2	西地区の遺構と遺物	23
IV	天性寺跡の調査	26
1	A地区の遺構と遺物	26
2	B地区の遺構と遺物	31
3	C地区の遺構と遺物	33
4	D地区の遺構と遺物	35
V	道祖神遺跡の調査	44
VI	道祖神塚の調査	45
1	第1号塚	45
2	第2号塚	48
3	道祖神第1号塚におけるテフラ分析報告	49
VII	結 び	50
1	古墳時代後期から奈良・平安時代の集落	50
2	中近世の調査の成果	51

挿図目次

第1図 調査地区位置図	2
第2図 周辺の遺跡	5
第3図 大門遺跡全測図	7
第4図 大門遺跡東地区全体図	9
第5図 住居跡実測図1	11
第6図 住居跡実測図2	12
第7図 住居跡出土遺物実測図	13
第8図 第1号土器集中地点実測図	15
第9図 第1号上器集中地点出土遺物実測図	16
第10図 第2・3号土器集中地点実測図	18
第11図 第2・3号土器集中地点出土遺物実測図	19
第12図 ピット群実測図	21
第13図 第1号溝跡実測図	22
第14図 大門遺跡西地区全体図	24
第15図 第3号溝跡実測図	25
第16図 玉性寺跡全体図	27
第17図 玉性寺跡A地区遺物分布図	28
第18図 玉性寺跡A地区出土遺物実測図1	29
第19図 玉性寺跡A地区出土遺物実測図2	30
第20図 玉性寺跡出土古錢拓影	31
第21図 玉性寺跡B地区溝跡実測図	32
第22図 玉性寺跡B地区出土遺物実測図	33
第23図 玉性寺跡C地区本堂跡・井戸跡実測図	34
第24図 玉性寺跡D地区構構実測図	36
第25図 玉性寺跡D地区出土遺物実測図1	37
第26図 玉性寺跡D地区出土遺物実測図2	38
第27図 玉性寺跡D地区出土遺物実測図3	39
第28図 玉性寺跡D地区出土遺物実測図4	40
第29図 玉性寺跡D地区出土遺物実測図5	41
第30図 玉性寺跡D地区出土遺物実測図6	42
第31図 玉性寺跡D地区出土遺物実測図7	43
第32図 道祖神遺跡全体図	45
第33図 道祖神塚全体図	46

第34図 造祖神第1号塚実測図	47
第35図 造祖神第2号塚実測図	48

図版目次

- 図版1 遺跡（航空写真）
1. 遺跡群全景 2. 遺跡群全景（南から）
- 図版2 遺跡（大門遺跡東地区）
1. 遺跡全景（航空写真） 2. 遺跡全景（北東から）
- 図版3 遺跡（大門遺跡東地区）
1. 調査区全景（北から） 2. 調査区南側遺構分布
- 図版4 遺跡（大門遺跡東地区）
1. 第1号住居跡全景 2. 第2号住居跡全景
- 図版5 遺跡（大門遺跡東地区）
1. 第3号住居跡全景 2. 第4号住居跡全景
- 図版6 遺跡（大門遺跡東地区）
1. 第1号住居跡上層 2. 第1号住居跡カマド 3. 第2号住居跡土層 4. 第2号住居跡遺物出土状態
5. 第3号住居跡土層 6. 第3号住居跡砥石出土状態 7. 第4号住居跡土層 8. 第4号住居跡カマド
- 図版7 遺跡（大門遺跡東地区）
1. 第1号土器集中地点（南から） 2. 第1号土器集中地点（西から）
- 図版8 遺跡（大門遺跡東地区）
1. 第2号土器集中地点（北から） 2. 第2号土器集中地点（東から）
- 図版9 遺跡（大門遺跡東地区）
1. 第2号・第3号（奥）土器集中地点 2. 环出土状態 3. 瓶出土状態 4. 第3号土器集中地点
5. 第3号土器集中地点 6. ピット群（南から） 7. 第1号溝跡（北東から） 8. 表上側風景
- 図版10 遺跡（大門遺跡西地区）
1. 調査区全景 2. 第3号溝全景 3. 第3号溝上層 4. 墓石遺構 5. 単独墓出土状態
- 図版11 遺跡（玉性寺跡）
1. 遺跡全景（航空写真、北から） 2. 遺跡全景（航空写真、北東から）
- 図版12 遺跡（玉性寺跡A地区）
1. A・B地区遺跡 2. A地区全景 3. カワラケ 4. カワラケ 5. 板碑
- 図版13 遺跡（玉性寺跡B地区）
1. 第1～3号溝跡 2. 玉性寺燃代住職墓地
- 図版14 遺跡（玉性寺C地区）
1. 本堂跡（東から） 2. 磐石 3. 磐石 4. 磐石 5. 磐石断面

図版15 遺跡（玉性寺跡C地区）

1. 井戸跡（南から） 2. 井戸跡断面

図版16 遺跡（玉性寺跡D地区）

1. 瓦捨場 2. 瓦捨場堆積状態

図版17 遺跡（玉性寺跡D地区）

1. 瓦捨場堆積状態 2. 調査風景

図版18 遺跡（道祖神道路）

1. 調査区全景（北西から） 2. 調査区全景（南から）

図版19 遺跡（道祖神塚）

1. 塚遠景 2. 第1号塚（西から）

図版20 遺跡（道祖神塚）

1. 第1号塚（南から） 2. 第1号塚断面

図版21 遺跡（道祖神塚）

1. 第2号塚（東から） 2. 第2号塚断面

図版22 遺物（大門遺跡）

住居跡出土遺物

図版23 遺物（大門遺跡）

土器集中地点出土遺物

図版24 遺物（大門遺跡）

土器集中地点・溝・寺西地区出土遺物

図版25 遺物（玉性寺跡）

A地区出土遺物

図版26 遺物（玉性寺跡）

A・B・D地区出土遺物

図版27 遺物（玉性寺跡）

D地区出土遺物

図版28 遺物（玉性寺跡）

D地区出土遺物

I 発掘調査に至る経過

1 発掘調査に至る経過

熊谷西部地区は広大な耕作地を有しているが土地改良事業は未実施の地域であった。昭和56年度からこの地域の土地改良事業が計画され、その中には川本町瀬山地区が組み込まれることとなった。川本町分は3か年事業で昭和62年度に強戸地区、昭和63年度に梨の木地区他、昭和64年度に道祖神地区他で事業が計画された。昭和61年12月に町教育委員会に当てて、深谷土地改良事務所から最初の協議が有り、現地調査を行ったところ、遺物散布地が数箇所で確認されたため、昭和62年度分について昭和61年12月22日に試掘調査を実施した。その結果、遺構等は検出されなかった。

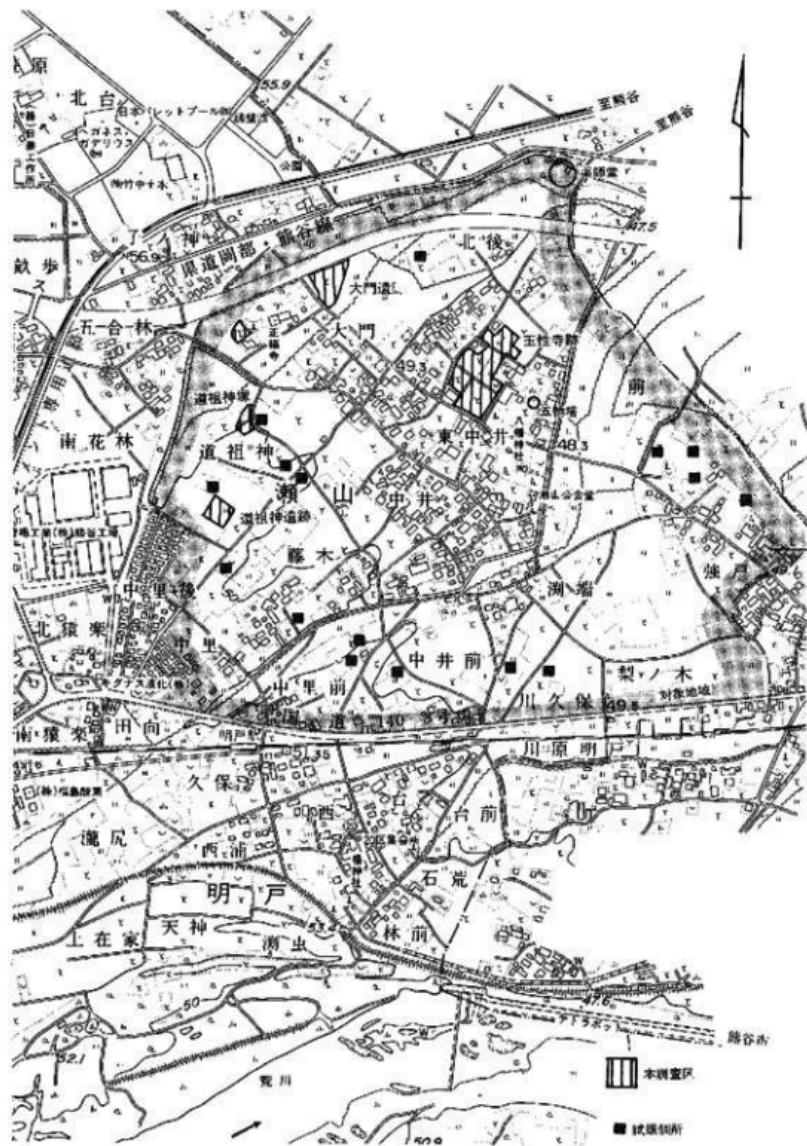
そこで、次年度以降の事業に備えて昭和62年12月21～23日に、事業予定地内の全域にわたり、4×2mグリッドを人力で試掘調査を実施した。その結果、昭和63年度の予定地内には遺跡は所在せず、昭和64年度の事業予定地内の4地点に遺跡が所在することが判明した。そこで遺跡の規模と範囲確認のため、再試掘を昭和63年12月21～22日に重機で行った。試掘結果に基づき昭和64年度の事業計画をたて、大門地区的奈良・平安時代の集落跡(3700 m²)、馬場地区的近世寺院跡(9000 m²)、道祖神北地区の塚2基(200 m²)と道祖神南地区の包蔵地(2000 m²)の計4か所(計15000 m²)の事業予定地内で発掘調査を実施することとした。発掘届けは、元委保記第5-5642号である。

2 発掘調査の工程と概要

発掘調査は、平成元年9月11日から14日まで道祖神南地区の調査を実施した。その後、大門地区を10月18日から12月23日まで、玉性寺跡を12月1日から1月10日、道祖神北地区を元年11月22日から2年1月12日まで調査を実施した。すべての調査が完了したのは、平成2年1月12日である。

発掘調査の方法としては、調査実施の4地区が離れて分布しているため、各地区ごとに、4mを基本にグリッド設定した。大門地区は、調査が東地区と西地区の2地点にわたるため、公共座標に基づき全体に80mの大メッシュをかけ位置関係を明らかにした後に、バックホーで表土を除去し、遺構確認・杭打ちを行った。遺構番号は両地区を通して付けた。玉性寺跡・道祖神南地区では、遺構の分布状況を明らかにするため、杭打ち後、トレンチによる調査を実施し、遺構遺物の確認されたトレンチを中心に隨時拡張し、調査を実施した。道祖神北地区の塚は、グリッド設定後、地形測量、トレンチによる上層確認を行い全体の掘り下げを行った。

各地点の調査概要は、大門遺跡では、東地区から住居跡4軒、溝跡1条、土器集中地点3か所、上塙12基、ピット群1基、西地区からは、溝跡1条、単独の甕、土壙2基、集石4基が検出された。玉性寺跡では、中近世の遺物包含層、近世と推定される本堂跡の柱の根石、井戸跡、遺物廃棄地点等が検出された。道祖神南地区(道祖神遺跡)は、土壙6基と土師器の小片が若干出土した。道祖神北地区(道祖神塚)では2基の塚が調査され、第1号塚からは、構築面から天明年間噴出の浅間山の火山灰が検出され、第2号塚から人骨と古錢が検出された。



第1図 調査地区位置図 (scale 1/10000)

II 遺跡群の立地と環境

1 地理的環境

瀬山遺跡群は、埼玉県大里郡川本町大字瀬山地内に所在し、秩父鉄道明戸駅北方に位置し、東方は熊谷市と隣接している。遺跡群の北側には、140号バイパスが通過しており県北部の東西交通の要となっている。荒川左岸の標高40m前後の自然堤防上に立地し、北から北西部にかけて観音山・三ヶ尻台地等の柳引台地の東端部が広がり、瀬山低地とは、比高5mの急斜な崖で区切られている。また、自然堤防の東と南側は約1mほどの比高差のある沖積低地が広がり、遺跡の立地は東西500m、南北600m程の範囲に広がる。微高地はほぼ平坦であるが、南西から北東向きにやや傾斜しており、同方向の浅い谷が数条確認されている。崖下は、昭和初期まで沼地が点在していたと伝えられ、また沙山ガ池といわれる渡辺草山が歌に詠んだ池の痕跡が近年まで残されていた。

瀬山遺跡群の位置する低地は、縄文時代には荒川の流路内であったと言われており、その後陸化したものと考えられている。熊谷市では、同様に自然堤防上に位置する古墳時代後期から奈良平安時代以降の遺跡が連続しており、この低地の利用が始まったのはその頃となると考えられる。

遺跡群一帯の層序は、礫層を基盤としている。表土層は平均30cm程度で、深いところでは50cmを越す箇所もあった。シルト層は平均20cm程度で、自然堤防中央では薄く、下部の礫層が露出する箇所があった。縁辺にいくに従い礫層まで深くなり厚くなる。

2 歴史的環境

(註2) 川本町の遺跡は、從米荒川の南側に多く発見されており、北側での遺跡分布は薄いと言われてきた。しかし、この瀬山遺跡群の調査や上原の縄文時代中期の集落跡などの新発見が続き、從米の見解は修正されつつある。

瀬山周辺の遺跡群は、柳引台地上の遺跡群、瀬山低地から熊谷扇状地にかけての自然堤防上の遺跡群、荒川を対峙した旧男衾地内の遺跡群にわけられる。ここでは、時代別に周辺の遺跡を概観してみる。

旧石器・縄文・弥生時代の遺跡

旧石器時代の遺跡は、柳引台地上では、今までに発見されていないが、縄文時代草創期の遺跡が、数箇所確認されており、将来、発見されるものと期待される。縄文時代の遺跡としては、観音山の東に広がる熊谷市三ヶ尻遺跡群(9)がある。新幹線建設に先立ち調査され、前期の住居跡12軒が発見されている。また、平成2年夏に川本町上原で実施された沢口遺跡(7)の調査では、中期の住居跡21軒が発見されている。この様に、縄文時代の遺跡は、南の江南台地に比べ稀薄ではあるが柳引台地上に点在して分布しており、調査例が増加してきている。弥生時代の遺跡は、熊谷市三ヶ尻上古遺跡(9)、横間葉遺跡(17)での中期の再墓塚、発見例があるが後期の遺跡は少ない。

古墳時代の遺跡

古墳時代の遺跡としては、櫛引台地上の古墳群と集落跡と自然堤防上の古墳群と集落跡にわけられる。櫛引台地上には南縁から東縁にかけて、川本町長在家古墳群(5)、熊谷市三ヶ尻古墳群(9)、籠原裏古墳群(14)、別府・木ノ本古墳群(18)などが連続して分布している。また、上流には川本町見目古墳群、花園町黒田古墳群などが所在する。また、自然堤防上には熊谷市宮塚古墳群(20)、下井古墳群が分布している。また、荒川の南岸には川本町鹿島古墳群(21)が約3kmにわたり分布している。川本町長在家古墳群は、瀬山遺跡群に接する台地上に立地しており、数基の古墳で形成されていた。昭和43年にそのうちの「権田塚」が調査され、石室が検出されている。

集落跡としては、台地上の三ヶ尻遺跡群などが分布している。古墳群の分布に比べ、現在までは集落跡の調査例が少ないが、櫛引台地北方の深谷地内の低地では大規模な集落が検出されており、今後類例が増加するものと考えられる。

奈良平安時代の遺跡

奈良平安時代の瀬山周辺は、律令制下における古代榛沢郡と幡羅郡の周辺にあたると推定されている。荒川の南側は男衾郡にあたる。

遺跡の分布は、主に瀬山より東方に連続して分布しており、熊谷市三ヶ尻遺跡、上辻遺跡、下辻遺跡、樋の上遺跡などが一連の遺跡群(13)と考えられ、下流の自然堤防上に分布している。さらに東方に下ると別府(16)や中条条里遺跡が分布しており、この熊谷低地には、律令制の遺跡が濃密に分布している。荒川の南側の遺跡は、川に沿った河岸段丘上に川本町鹿島・川端(22)などの遺跡群が帶状に分布している。

中世の遺跡

中世の遺跡としては、瀬山近在には比較的多く分布している。玉性寺跡の南方100mには、鎌倉時代に位置づけられる瀬山の五輪塔がある。この五輪塔は、多孔質の凝灰岩を用いており、現高2.9mをはかる。また、大門遺跡に隣接する正福寺には、玉性寺より移された大日如来座像があり、底面に康応元年(1389)以下の長文の墨書銘が残されている。^(註3)境内には板碑數点が残されており、元徳4年(1332)、親應元年(1350)、康暦3年(1381)、永正10年(1513)の銘が記されている。瀬山の南の明戸地区には、樋之内と云う地名が残されており、館跡(6)が所在するものと考えられている。明戸から発見されたもので過去に成骨器や五輪の塔の破片が出土したと伝えられ、伴出した資料から、15~16世紀頃のものと推定される。

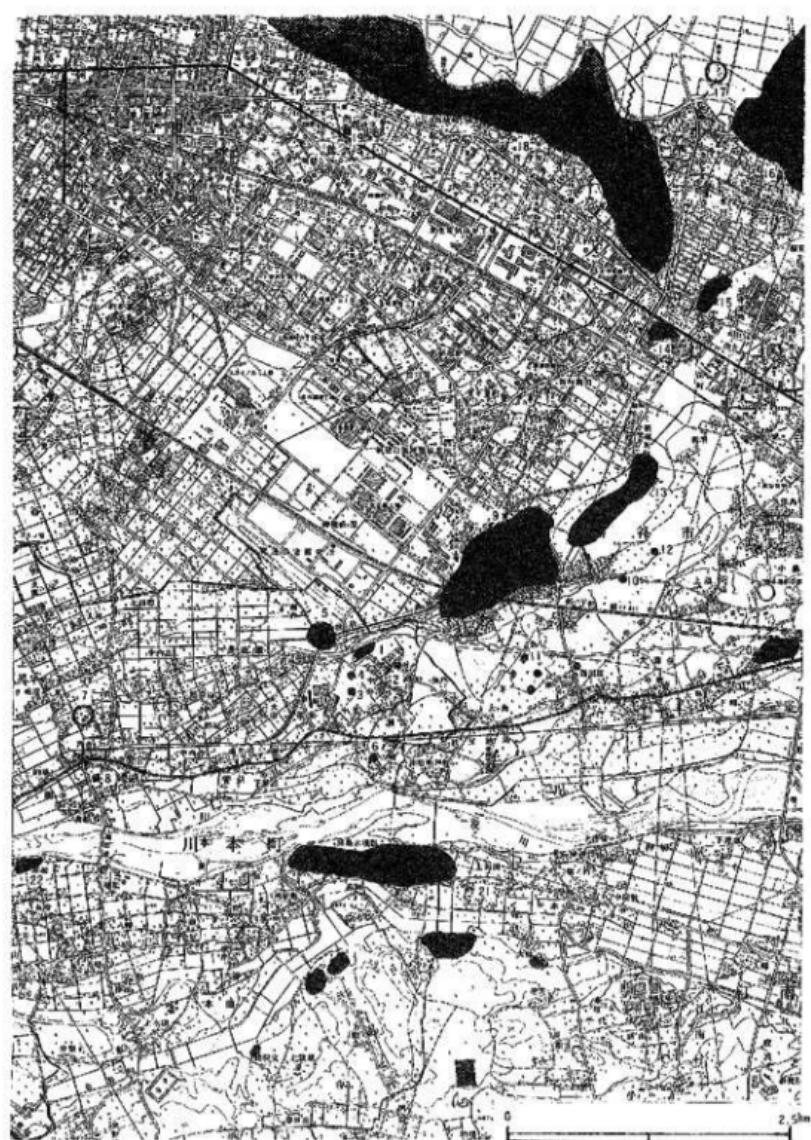
また、熊谷市黒沢館(12)では、全城が発掘調査され中世の館の全容が明らかにされた。他の中世の遺跡としては、樋の上遺跡、社裏遺跡(11)などが挙げられる。

近世以降の遺跡の調査例としては、断片的な資料しかないが、熊谷市地内で土地改良に伴う発掘で庚申塚遺跡(10)など調査例が増加している。瀬山集落の南端には秩父往還が通っている。

(註1) ハケ下には、6箇所あったといわれ、東から「でい沼」(大沼)、「こい沼」(小沼)、「ひし沼」(菱が淵にあった)、「にしんば」、「番七沼」、「柳沼」(柳の木が淵にあった)と呼ばれていた。馬場敬次氏より教示。

(註2) 「川本町史」1989。

(註3) 「美術工芸品(彫刻)所在緊急調査報告書」1985 埼玉県立博物館。



第2図 周辺の遺跡

III 大門遺跡の調査

大門遺跡は、瀬山地区の北に位置しており、玉性寺跡の西北250mに位置している。東西約250m、南北約70mの細長い島状の自然堤防上に立地している。北の岸線からは約80m離れており、間には川の流路にあたる沖積地が帯状に位置している。昭和初期までは、沼沢地が点在していたと伝えられており、湧水をもつ後背湿地を形成していたと推定される。遺跡の立地する微高地には、現在正福寺があり、調査はこの自然堤防の両端にあたる正福寺をはさんだ東と西の2地区で実施した。

調査では、この微高地の北辺を区画するような溝跡が両地区ともに検出された。それぞれの地区的概要は、東地区では、住居跡4軒、土器集中地点3か所、土壙12基、ピット群1か所・溝2条が検出され、西地区では、集石4か所、土壙2基、単独の甕1基、溝1条が検出された。

遺跡の層序は、硬層を基盤とし、表土層は平均30cm程度であった。シルト層は平均20cm程度、南西から北東に向かい薄くなり、浅いところでは下部の礫層が露出する箇所があった。

1 東地区的造構と遺物

東地区はほぼ三角形を呈し約2800m²を調査した。調査区内は東に向かい緩やかに傾斜し、東端は1m程の段差をもち水田面に至る。検出された造構としては、住居跡4軒と土器集中箇所3か所、上壙12基、ピット群1か所、溝跡2条が検出されている。住居跡は、調査区の東側岸線寄りで北東に2軒、南に2軒が近接して分布し両者の間は約30m離れている。土器集中箇所は微高地中央から1か所と調査区東側の傾斜地から2か所検出されている。

a、住居跡（第5図～第6図）

第1号住居跡（第5図）

調査区南東、13-Oグリッド付近から検出された。第3号住居跡から東に7m離れて、東の水田とは4mの距離がある。主軸は北東を向き、形態は長辺4.4m、短辺3.8mのほぼ正方形を呈している。壁高は平均0.3mを測る。床面は礫層に倒達している。カマドは北壁の東よりに作られており、袖石として棒状礫を用いている。壁から約0.7m北に突出し、焼上は少なく使用痕は明確ではない。カマドの南側の延長線上には、50×35cm大の偏平礫が残されている。柱穴や周溝等は、確認できなかつた。

出土遺物は、東コーナーから土師器环が、床面からやや浮いた状態で出土し、覆上中から須恵器环、蓋、土師器环・甕などが検出されている。

第1号住居跡上層

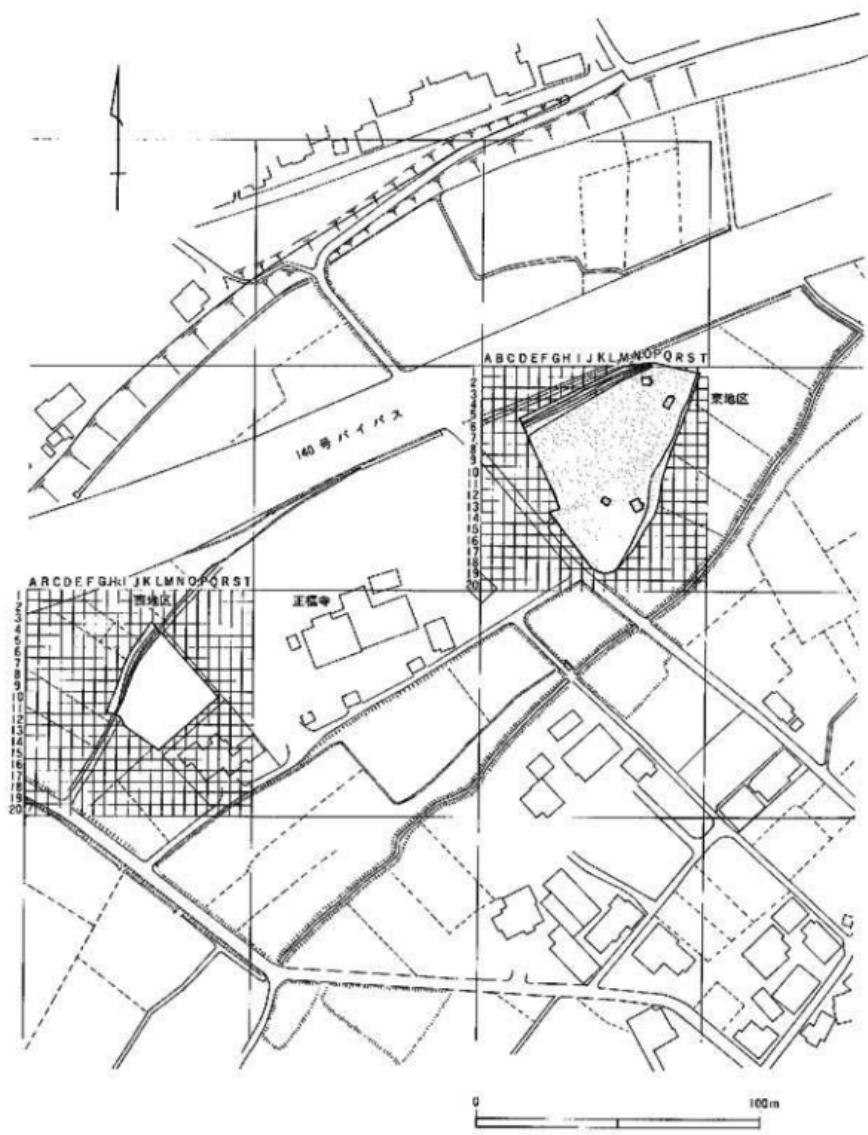
第1層 試掘坑

第2層 黒色土層 白色粒を多量に含む。しまり良好

第3層 茶褐色土層 白色粒を多量に含む砂質土層。

第4層 黒褐色土層 白色バミスを多量に含む。

第5層 黒褐色土層 砂質土層。（カマド上層）



第3図 大門遺跡全測図

第2号住居跡（第5図）

調査区中央、12-Lグリッドから検出された。第1号住居跡から西に7m離れている。主軸は北東を向き、形態は長辺3.0m、短辺2.5mのほぼ正方形を呈している。壁高は平均0.3mを測る。床面は礫層に到達している。カマドは北壁の東端に作られており、壁から約0.2m北に突出し、焼土は少なく使用痕は明確ではない。覆土中には、多量の河原礫が含まれており、一時期に埋め戻されたことが推定される。柱穴や周溝等は、確認できなかった。

出土遺物は、カマドの前面から、須恵器壺蓋、土師器壺が床面よりやや浮いて出土し須恵器壺、土師器壺破片などが検出されている。

第2号住居跡土層

第1層 灰褐色砂層 砂層

第2層 黒色土層 上面に5~10cm大的河原礫を多量に含む。1~2mm大的炭化粒を多量に含む。しまり良好、粘性有り。

第3層 黄褐色土層 炭化紋を多く含む。砂質土層。

第4層 黄褐色土層 白色粒を多量に含む。しまり良好（カマド上層）。

第5層 赤褐色土層 薄い焼土層。しまり悪い（カマド土層）。

第6層 褐色土層 砂質土層（カマド土層）。

第3号住居跡（第6図）

調査区北東、2-Oグリッドから検出された。第4号住居跡から北西に6m離れている。主軸は東を向き、形態は長辺2.8m、短辺2.2mの長方形を呈している。壁高は平均0.2mで西側の最も深いところで0.3mを測る。床面は礫層に到達している。カマドは北壁に作られており、壁から約0.6m北に突出し、焼土は少なく使用痕は明確ではない。柱穴や周溝等は、確認できなかった。

出土遺物は、カマド周辺から須恵器壺、土師器壺破片、北東コーナーから磁石が検出されている。

第3号住居跡土層

第1層 褐色土層 径5mm大的小礫を含む。白色粒を含む。

第2層 黑褐色土層 径3mm大的焼土粒を多量に含む。炭化粒もわずかに含む。

第3層 褐色土層 径2~3mm大的焼土粒を多量に含む。しまり良好、粘性あり（カマド土層）。

第4層 灰褐色砂質土層 径1mm以下の焼土粒を含む（カマド土層）。

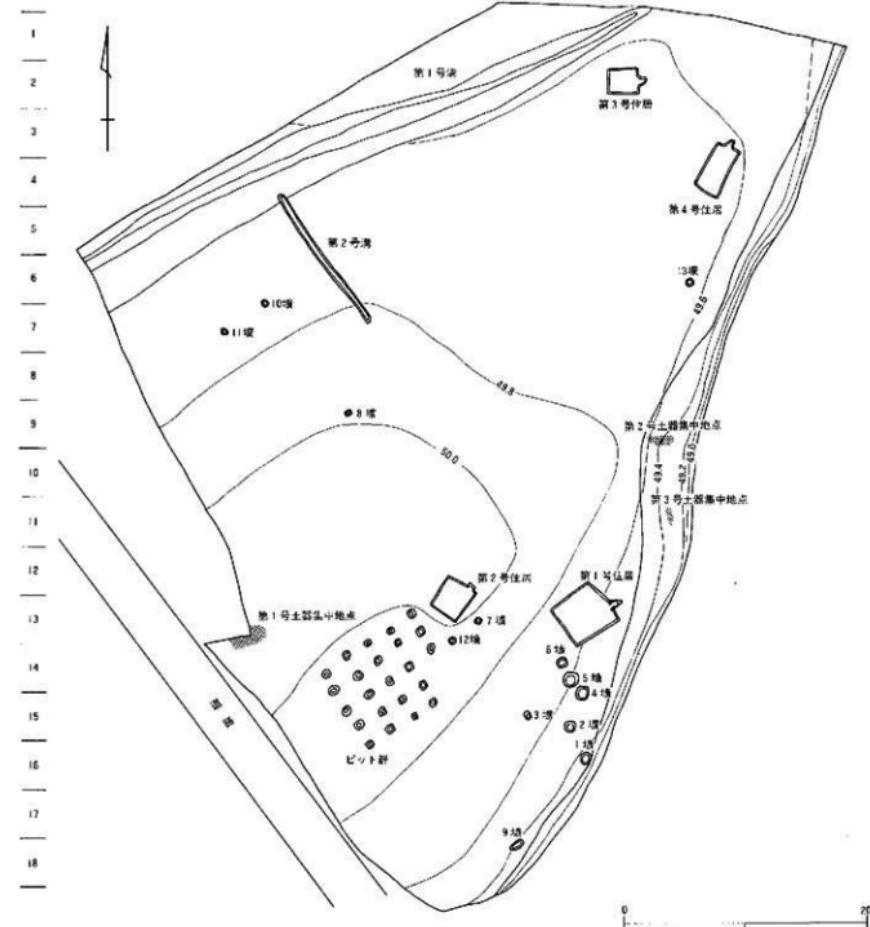
第4号住居跡（第6図）

調査区東端、4-Qグリッド付近から検出された。第2号住居跡から南東に6.0m離れている。主軸は北東を向き、形態は長辺4.0m、短辺2.2mの細長い長方形を呈している。壁高は平均0.2mを測る。住居跡は、基盤の礫層を掘り抜いて構築されており、床面は礫層が露呈している。カマドは北壁中央に作られており、44×20cmの河原石が出土している。壁から約0.6m北に突出し、焼土は少なく使用痕は明確ではない。住居跡のはば中央に、44×31cmの偏平礫が残されている。柱穴や周溝等は、確認できなかった。

出土遺物は、カマド周辺から須恵器壺、蓋、土師器壺破片が検出されている。

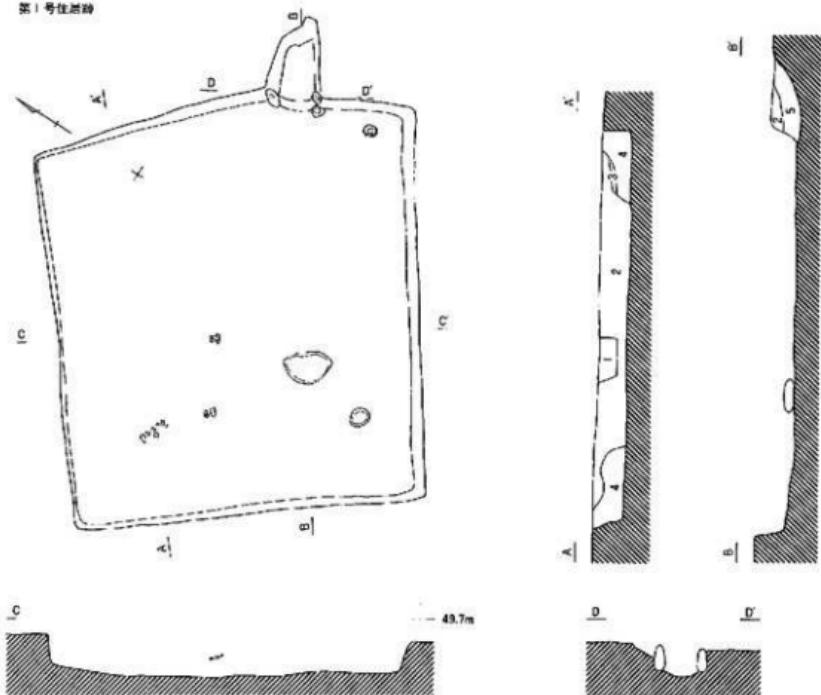
第4号住居跡カマド土層

D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | R | S | T

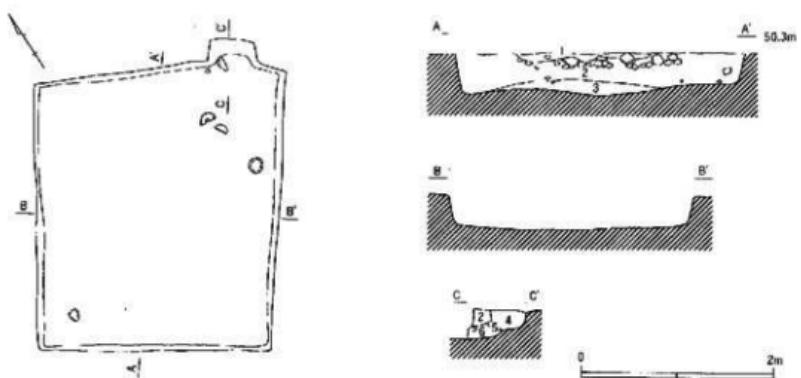


第4図 大門遺跡東地区全体図

第1号住居跡



第2号住居跡



第5図 住居跡実測図1

第1層 茶褐色土層 白色粒、径1cm大の砾を含む。

第2層 黒褐色土層 硬質で焼土粒を微量に含む。

b、住居跡出土遺物（第7図1～13）

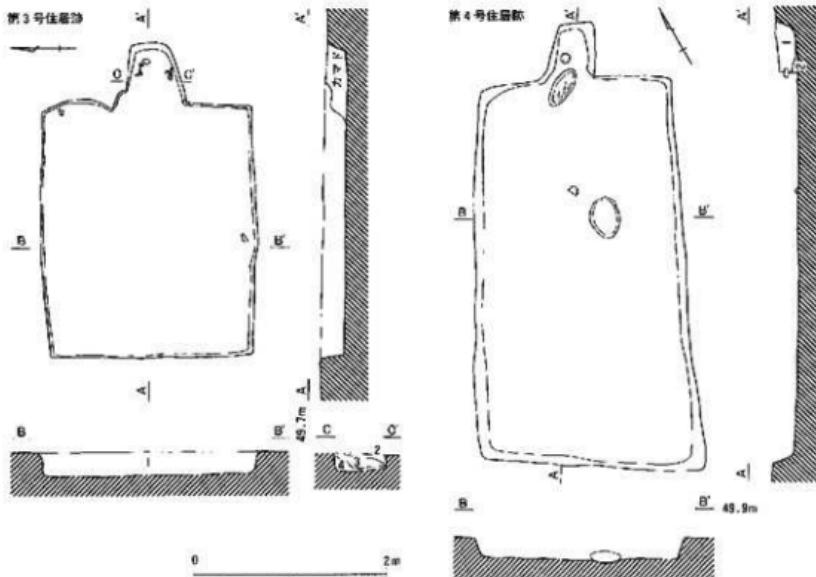
第1号住居跡出土遺物（第7図1～13）

1は、土師器環で住居跡の南東隅カマド付近で出土した。完形で口径12.6cm、器高3.2cmを測る。口縁部がやや内溝して立ち上がる。外面の口縁部下は横ナテ調整を行い、以下横位のヘラ削りを施している。底部はヘラ削りで作り出されている。茶褐色を呈し細かい砂粒を含み、焼成は良好である。

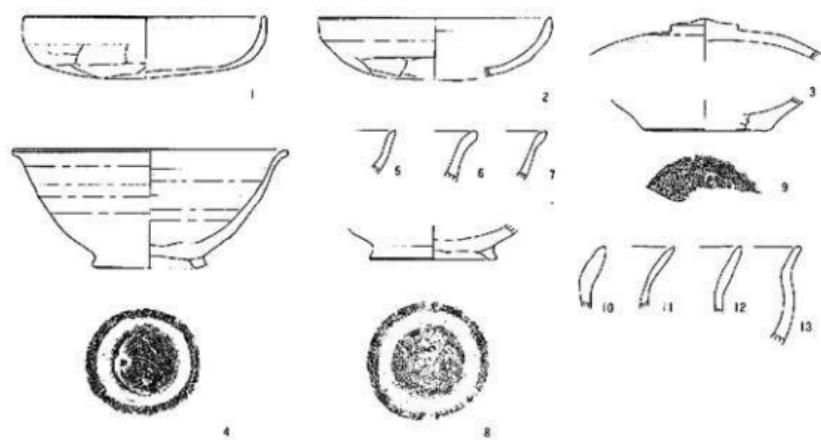
2は、土師器環で住居跡の覆土中から出土した。全体の4分の1の残存で推定口径12.0cm、現高3.0cmを測る。口縁部がやや内溝して立ち上がる。外面の口縁部下は横ナテ調整を行い、以下横位のヘラ削りを施している。橙褐色を呈し細かい砂粒を多量に含み、磨滅している。

3は、土師質須恵器環で住居の覆土中から出土した。全体の2分の1の残存で現存部の径12.0cm、現高2.0cmを測る。紐は、径3.5cm、高さ0.7cmで、上面は皿状になり、中央が突出している。外面は橙褐色、内面は灰褐色を呈し、細かい砂粒を多量に含む。磨滅が著しい。

4は、須恵器高台環で住居跡の覆土中から出土した。全体の3分の1の残存で推定口径14.3cm、器高6.3cmを測る。口縁部がやや外反して立ち上がる。外面は横ナテ調整を行っている。灰褐色で、底部は橙褐色を呈し、細かい砂粒を含む。



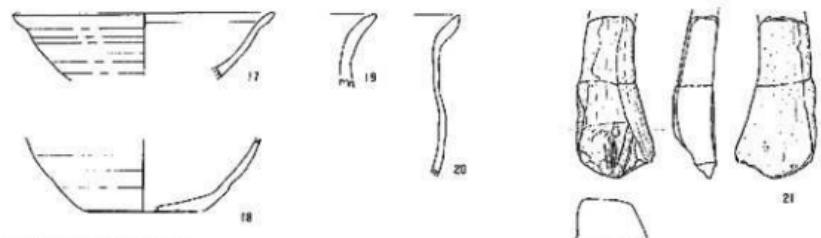
第6図 住居跡実測図2



第1号住居跡出土遺物(1~13)



第2号住居跡出土遺物(14~16)



第3号住居跡出土遺物(17~21)



第4号住居跡出土遺物(22~25)

0 10cm

第7図 住居跡出土遺物実測図

5は、土師器環の口縁部破片である。橙褐色を呈する。6と7は、須恵器環の口縁部破片である。共に口唇部が外反し、肥厚する。灰褐色で、砂礫粒を多量に含む。

8は、須恵器高台環の底部で住居の覆土中から出土した。底部破片で底径6.5 cm、現高1.9 cmを測る。外面は横ナデ調整を行っている。灰茶褐色を呈し、細かい砂礫粒を含む。焼成は悪い。

9は、須恵器環の底部で覆土から出土した。底部の4分の1の残存で推定底径6.5 cm、現高1.8 cmを測る。底部は糸切り底である。外面は黒褐色、内面は茶褐色を呈し、細かい砂礫粒を多量に含む。

10~13は、土師器甕の口縁部破片である。13は、胴部がふくらみをもつ。

第2号住居跡出土遺物（第7図14~16）

14は、土師器環で住居の床面から出土した。ほぼ完形で口縁の一部を欠損する。口径14.0 cm、器高3.1 cmを測る。口縁部がやや内湾して立ち上がる。外面の口縁部下は横ナデ調整を行い、以下横位のヘラ削りを施している。底部はヘラ削りで作り出されている。外面は黒褐色、内面は暗茶褐色を呈し、細かい砂粒を含み、焼成は良好である。

15は、土師器環で住居の床面から出土した。ほぼ完形で口縁の一部を欠損する。口径13.0 cm、器高3.0 cmを測る。口縁部が直線的に立ち上がる。外面の口縁部下は横ナデ調整を行い、以下横位のヘラ削りを施している。底部はヘラ削りで作り出されている。茶褐色を呈し、内面の一部に黒斑残す。細かい砂粒を含み、磨滅している。

16は、須恵器環蓋で住居の覆土中から出土した。ほぼ完形で紐を欠失する。径14.7 cm、現高2.8 cmを測る。縁端部はくの字状に屈曲している。紐は、径4.0 cmであったと推定される。灰褐色を呈し、砂礫粒を含む。焼成は良好である。

第3号住居跡出土遺物（第7図17~21）

17は、須恵器環で住居の覆土中から出土した。口縁の8分の1の残存で推定口径13.6 cm、現高3.5 cmを測る。口縁部がやや外反して立ち上がる。青灰褐色を呈し、細かい砂礫粒を含む。

18は、須恵器環で住居跡の覆土中から出土した。底部の8分の1の残存で推定底径6.2 cm、現高3.9 cmを測る。茶褐色を呈し、細かい砂礫粒を多量に含む。磨滅している。

19と20は、土師器甕の口縁部破片である。20は、頸部がコの字状に作り出されている。

21は、砥石で住居の北東隅、床面から出土した。長さ8.4 cm、幅4.0 cm、厚さ2.1 cmを測り、撥形を呈する。弓なりに屈曲している。正面下端は刃の整えに用いている。表面の一部は剥落している。凝灰岩製である。

第4号住居跡出土遺物（第7図22~25）

22は、須恵器環蓋で住居の覆土から出土した。全体の2分の1の残存で紐を欠失する。径13.8 cm、現高1.8 cmを測る。縁端部はくの字状に屈曲している。灰褐色を呈し、細かい砂粒を含む。焼成は良好である。

23は、土師器甕底部で住居の覆土から出土した。底部の8分の1の残存で推定底径6.7 cm、現高2.4 cmを測る。暗茶褐色を呈し、細かい砂礫粒を多量に含む。磨滅している。

24は、須恵器環の口縁部破片で、25は、土師器甕の口縁部破片である。

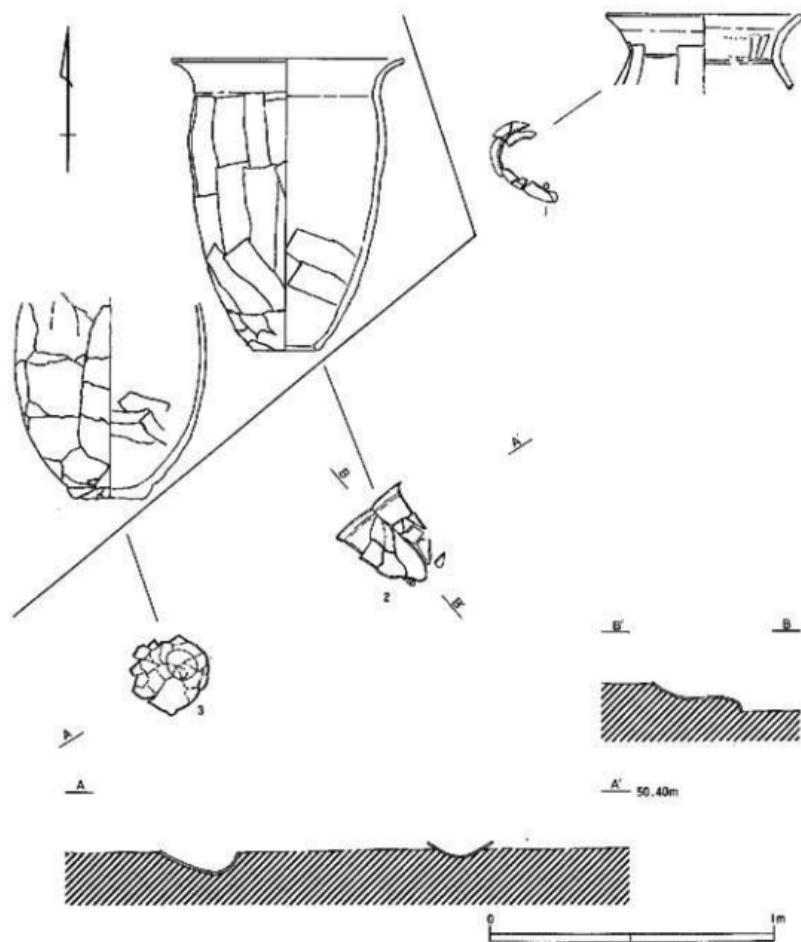
c、土器集中箇所（第8~11図）

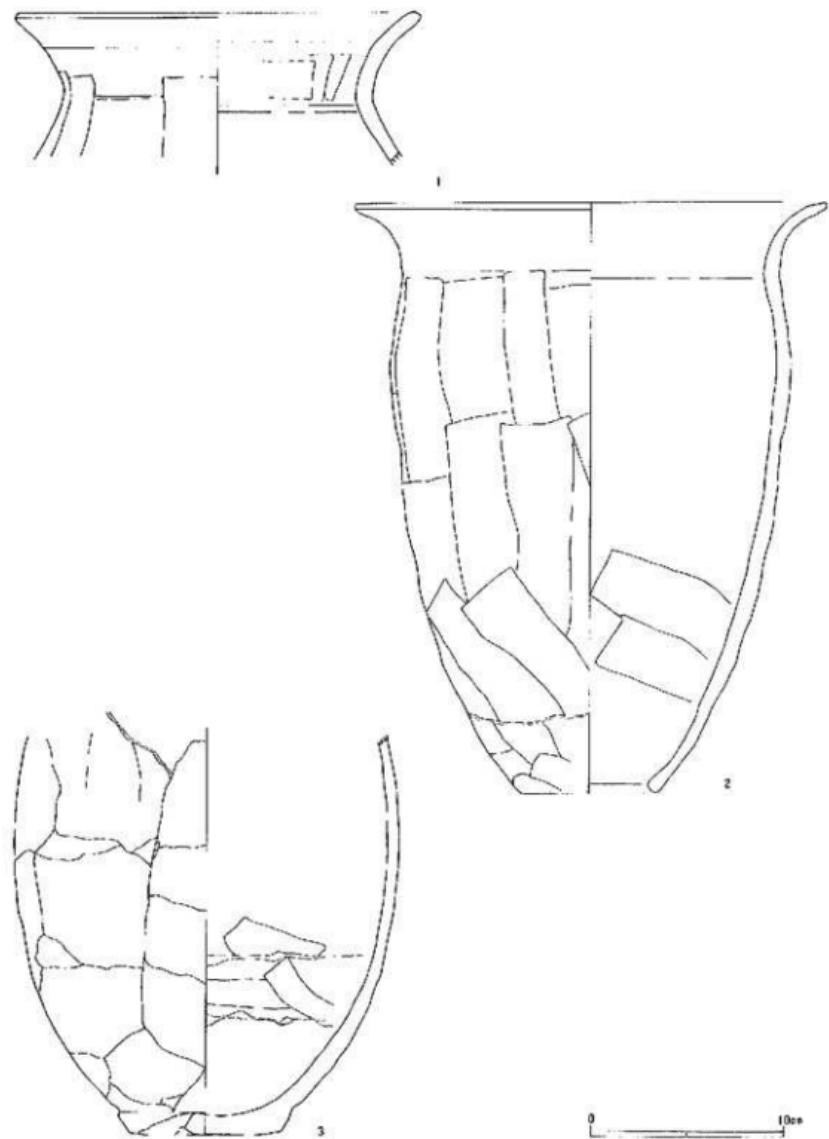
第1号土器物集中箇所（第8図）

調査区の東壁際に位置しており、第2号住居跡の西15.0m、13-Hグリッド付近から検出された。1mほどの間隔で土師器甕2点と甌1点の計3点がほぼ同レベルで隣接して検出された。周辺に薄い焼土の分布が認められたが、堀込みなどは確認されなかった。

出土遺物（第9図1～3）

1は、土師器の甕で口縁部の2分の1が残存している。現高は7.5cm、推定口径21.0cmを測る。口縁部は強く外反している、肩部は縱方向のヘラ削りがほどこされている。内外面とも橙褐色を呈





第9圖 第1号土器集中地点出土遺物実測図

し、小縁をわずかに含む。

2は、土師器の瓶で全周の2分の1が残存している。器高は30.8cm、推定口径24.6cmを測る。口縁部は強く外反している、胴部は縦方向のヘラ削りがほどこされている。内外面とも黄褐色を呈し、小縁をわずかに含む。

3は、土師器の甕で胴下半が残存している。現高は20.9cm、底径8.0cmを測る。胴部の張る器形で、底部は台状に作り出されている。外面は磨滅しているが、縦方向のヘラ削りがほどこされている。外面は黒褐色を呈し、内面は黒色を呈し、小縁をわずかに含む。

第2号上器集中箇所（第10図）

調査区の東側の傾斜地から検出され、第3号土器集中箇所の北5.0m、第1号住居跡の東北13.0mにあり、10-Pグリッドに位置している。東西2×南北0.2mの細長い範囲から上器が集中して出土している。東西方向の傾斜にそいはば同レベルで検出され、遺物の出土層位、分布に差は認められない。出土遺物は、土師器环、小形壺、台付甕、甕、壺などが出土している。

出土遺物（第11図）

1は、土師器環で完形である。器高は10.6cm、口径12.6cmを測る。頸部が段を形成し、ゆるやかにくの字状に屈曲し、口縁部は緩やかに内湾する。口縁部は横ナデ、底部はヘラ削りを施している。内外面とも赤褐色を呈し、緻密な胎土である。

2は、土師器環で全周の2分の1残存している。器高は5.4cm、推定口径12.0cmを測る。頸部には段となり、口縁部は緩やかに内湾する。口縁部は横ナデで、底部はヘラ削りを施している。内外面とも赤褐色を呈し、緻密な胎土である。

3は、土師器環で全周の4分の1残存している。現高は5.2cm、推定口径11.0cmを測る。口縁部は横ナデで整形され、わずかに段を形成している。外面は茶褐色、内面は黒褐色を呈し、表面は風化している。細かい砂粒・輝石を多量に含む。

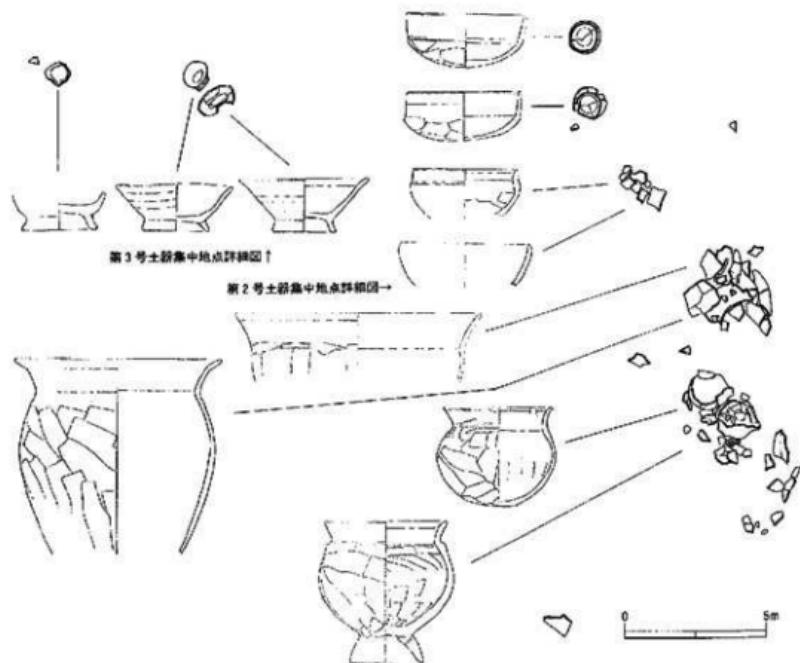
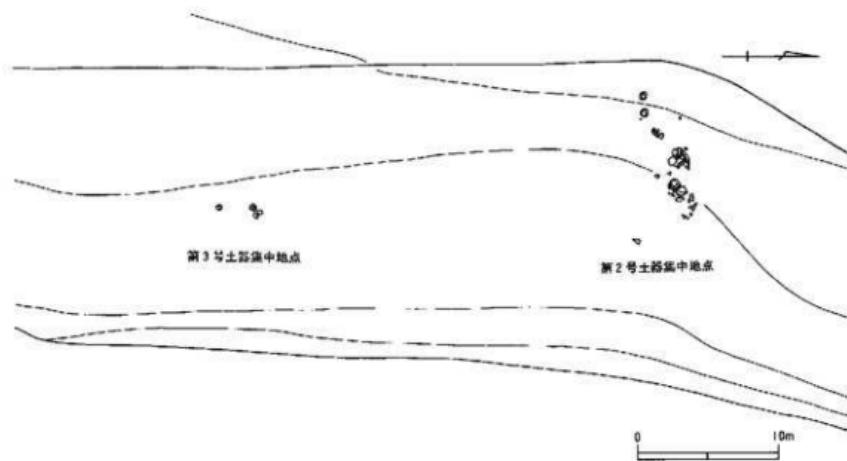
4は、土師器環で全周の4分の1残存している。現高は4.5cm、推定口径13.4cmを測る。口縁部はやや内湾して立ち上がる。茶褐色を呈し、表面は風化している。細かい砂粒を含む。

5は、土師器小形壺で全周の3分の2残存している。器高は10.7cm、推定口径11.4cmを測る。口縁はやや外反して立ち上がり、胴部は球状を呈し、底部は丸底を呈する。口縁部は横ナデ、胴部以下は横方向のヘラ削りを施している。橙褐色を呈し、細かい砂粒を含む。

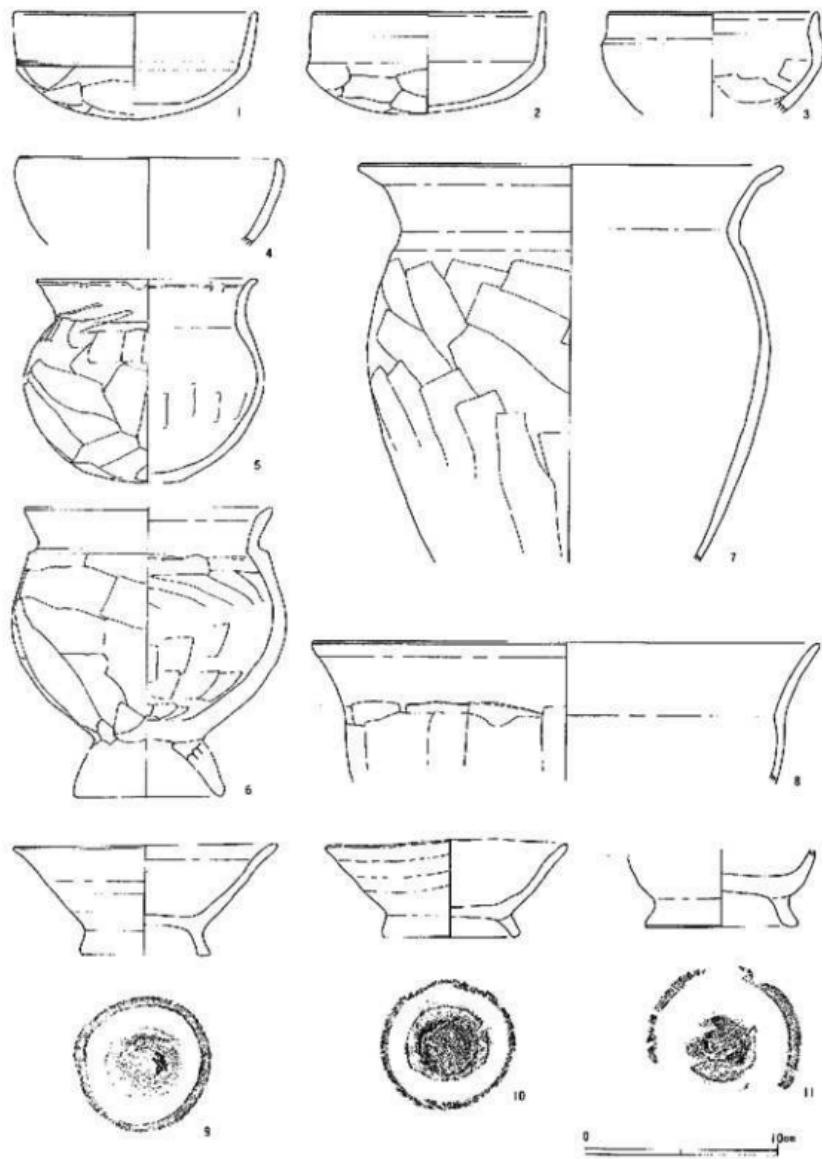
6は、土師器台付甕で脚部を欠損している。現高は13.7cm、口径12.8cmを測る。口縁はやや外反して立ち上がり、頸部は段を有する。胴部は球状を呈し、最大径は胴上部にある。器厚は0.4mmと比較的厚い。口縁部は横ナデ、胴部以下は横から縦方向のヘラ削りを施している。暗茶褐色を呈し、細かい砂粒・輝石を含む。

7は、土師器甕である。全体の2分の1が残存している。現高は20.6cm、推定口径22.0cmを測り、器厚は0.2cmと極めて薄い。口縁部は強く外反している、胴部は横から縦方向のヘラ削りがほどこされている。内外面とも橙褐色を呈し、小縁をわずかに含む。

8は、土師器甕である。口縁部の3分の1が残存している。現高は7.4cm、推定口径26.8cmを測る。口縁部はくの字状に緩く屈曲している、胴部は横から縦方向のヘラ削りがほどこされている。



第10図 第2・3号土器集中地点実測図（遺物のスケールは1/6）



第11図 第2・3号土器集中地点出土遺物実測図

内外面とも橙褐色を呈し、小穢をわずかに含む。

第3号上器集中箇所（第10図）

調査区の南側の傾斜地から検出され、11-Pグリッドに位置している。第2号上器集中箇所から南に5.0mで、第1号住居跡から北へ7.0mの位置である。約0.6mの範囲から等高線に沿って並んで検出され、出土遺物は、須恵器环が3個体出土している。

出土遺物（第11図）

9は、上師質須恵器高台环で口縁の一部を欠損する。器高は5.9cm、口径13.8cmを測る。口縁部は直線的に開く。底部は糸引き底で、高台は約1.5cmと高い。内外面とも茶褐色を呈し、細砂粒を多量に含む。焼成は不良である。

10は、上師質須恵器高台环で完形である。器高は4.8cm、口径12.5cmを測る。口縁部は直線的に開き、焼成の際の焼き歪みがある。底部は糸引き底で、高台は約1.0cmである。橙褐色を呈し、一部黒茶褐色である。細砂粒を含み、焼成は不良で磨滅が著しい。

11は、上師質須恵器高台环の底部で全周する。現高は4.0cm、底径8.0cmを測る。胴部はやや内溝して立ち上がる。底部は糸引き底で、高台は約1.7cmと高い。外面は茶褐色、内面は明茶褐色を呈している。細砂粒を含み、焼成は不良で磨滅が著しい。

d、その他の遺構と遺物

前述の遺構のほかに、調査区では、土壙13基、ピット群1基、溝跡2条が検出された。

第1号土壙

調査区南の傾斜地際の16-Nグリッドから検出された。形態は1.0×0.8mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。断面は箱状を呈する。覆土は、黒褐色の單一土層である。遺物は出土していない。

第2号土壙

調査区南の傾斜地よりの15-Nグリッドから検出された。第1号土壙の北1.9mに位置する。形態は、径0.8mの円形を呈し、深さ0.3mを測る。断面は箱状を呈する。覆土は、黒褐色の單一土層である。遺物は出土していない。

第3号土壙

調査区南の傾斜地よりの15-Mグリッドから検出された。第2号土壙の西北3.0mに位置する。形態は、長軸0.7m、短軸0.4mの楕円形を呈し、深さ0.2mを測る。断面は箱状を呈する。覆土は、黒褐色の單一土層である。遺物は出土していない。

第4号土壙

調査区南の傾斜地よりの15-Mグリッドから検出された。第2号土壙の北0.3mに位置する。形態は、一辺1.1mの方形を呈し、深さ0.3mを測る。断面は箱状を呈する。覆土は、黒褐色の單一土層である。遺物は出土していない。

第5号土壙

調査区南の傾斜地よりの14-Nグリッドから検出された。第4号土壙の北0.3mに隣接し、第6号土壙が北0.5mに位置する。形態は、一辺1.1mの方形を呈し、深さ0.3mを測る。断面は箱状を呈する。覆土は、黒褐色の單一土層である。遺物は出土していない。

第6号土壠

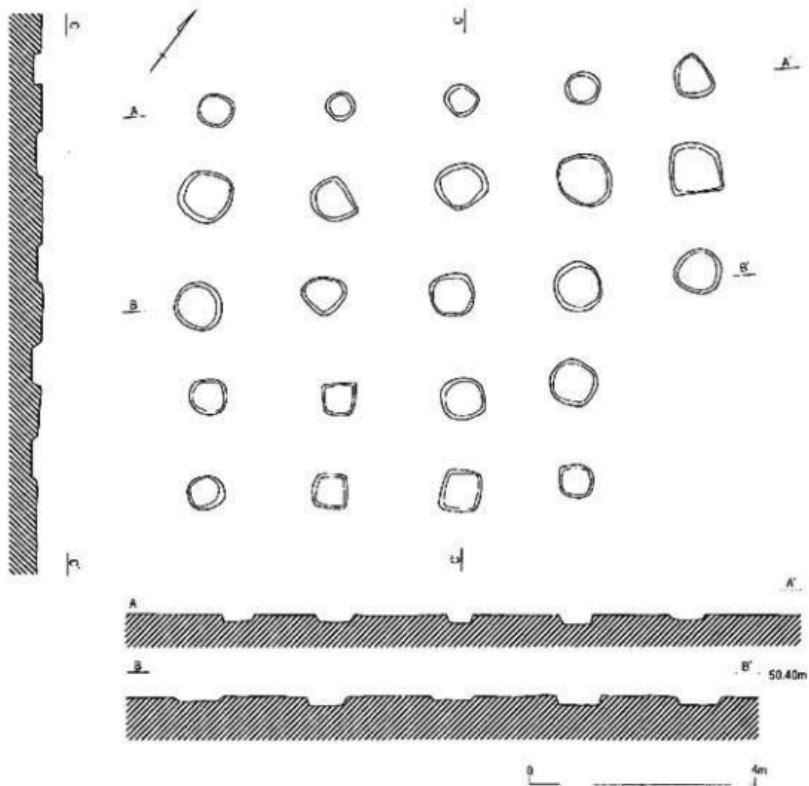
調査区南の傾斜地よりの14-Nグリッドから検出された。第5号土壠の北0.5mに隣接し、第1号住居跡の南1.5mに位置する。形態は、一辺0.7mの方形を呈し、深さ0.3mを測る。断面は箱状を呈する。覆土は、黒褐色の單一土層である。遺物は出土していない。

第7号土壠

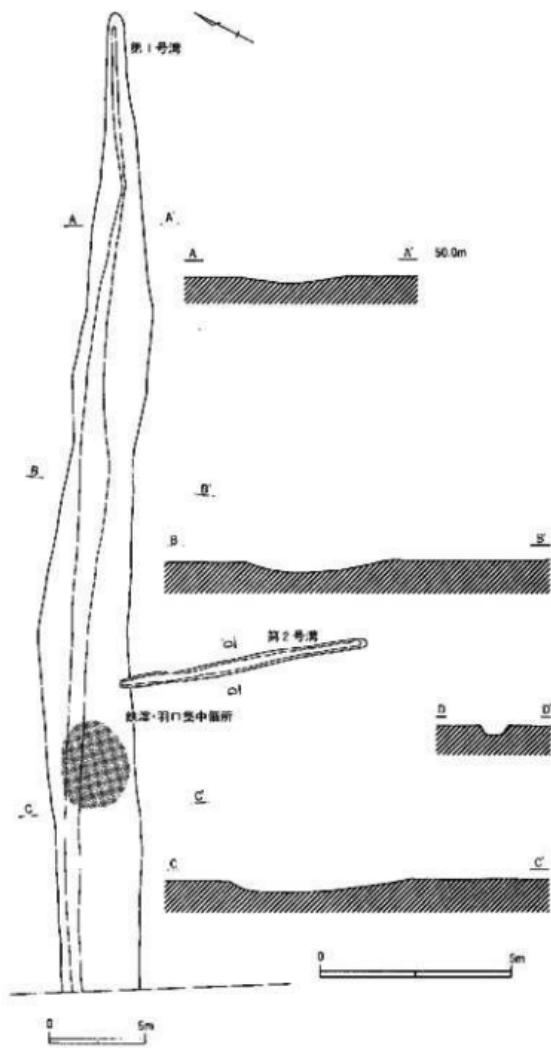
調査区南半の13-Lグリッドから検出された。第2号住居跡の東1.0mに位置している。形態は、一辺0.6mの方形を呈し、深さ0.2mを測る。断面は箱状を呈する。覆土は、黒褐色の單一土層である。遺物は出土していない。

第8号土壠

調査区中央の9-Iグリッドから検出された。形態は、一辺0.5mの方形を呈し、深さ0.3mを測る。断面は箱状を呈する。覆土は、黒褐色の單一土層である。遺物は出土していない。



第12図 ピット群実測図



第13図 第1号溝跡実測図

第9号土壙

調査区南端の傾斜地際の18-Mグリッドから検出された。形態は、長軸1.0m、短軸0.4mの楕円形を呈し、深さ0.2mを測る。断面は皿状を呈する。覆土は、黒褐色土層で焼土粒炭化粒を少量含む。遺物は出土していない。

第10号土壙

調査区西側の6-Hグリッドから検出された。第1号溝の南6.0mに位置する。形態は径0.6mの円形を呈し、深さ0.2mを測る。断面は箱状を呈する。覆土は、黒褐色土層である。遺物は出土していない。

第11号土壙

調査区西側の7-Gグリッドから検出された。第4号土壙の西南3.5mに位置し、第1号溝の南6.5mに位置する。形態は、径0.5m円形を呈し、深さ0.3mを測る。断面は箱状を呈する。覆土は、黒褐色土層である。遺物は出土していない。

第12号土壙

調査区南半の13-Lグリッドから検出された。第2号住居跡の南1.5mに位置し、ピット群の東に隣接している。形態は、径0.6mの円形を呈し、深さ0.2mを測る。断面は箱状を呈する。覆土は、黒褐色土層である。

mを測る。断面は箱状を呈する。覆土は、黒褐色の單一土層である。遺物は出土していない。

第13号土壙

調査区北東の傾斜地よりの6-Pグリッドから検出された。第4号住居跡の南7.0mに位置する。形態は、径0.7mの円形を呈し、深さ0.2mを測る。断面は箱状を呈する。覆土は、黒褐色土層であ

る。遺物は出土していない。

ピット群（第12図）

調査区南側に位置し、第2件居跡の南西2.0mの14-Jグリッドを中心に検出された。23基のピットが主軸を西北に向け、4周×5間の間隔で配置されている。ピットは、一辺1.8m前後の方形を基調とするものが多く、深さも0.1~0.2mと浅い。ピット間は1.8mあり、東南隅にはピットは存在しない。ピット内の覆土は褐色土層であり、識別は困難であったが乾燥すると明確に識別された。ピットの下底はいずれも礫層に達していた。遺物は出土していない。

第1号溝跡（第13図）

調査区の北端を区画するように、西南から北東にかけて延長50.6mが調査された。遺構は西側へ更に延びている。この溝跡の北側は、4m前後で低湿地にいたる。最大幅は4.8mで東にいくにつれて、浅く幅も狭くなっていく。深さは西端で0.3m、東端で0.1mを測る。断面形は、皿状を呈し、覆土は褐色土層である。遺物は、土師器環・甕細片と5-Gグリッド付近から鉄滓、羽口片が集中して検出されている。

第2号溝跡（第13図）

調査区の北半で第1号溝跡に直行して、東南から北西にかけて総延長12.8mが検出された。幅0.7m前後で第1号溝と交差する部分で溝は消滅している。断面形は箱形を呈し、深さ0.3mを測る。覆土は、黒褐色土層である。遺物は出土していない。

2 西地区の遺構と遺物

西地区は、東地区の西南140mに位置しており、約900m²を調査した。調査では、集石4か所、土壙2基、単独の甕1基、溝跡1条が検出された。

集石

4基の内9-K・10-Kグリッドから3基が隣接して検出され、9-Lグリッドから1基が4.0m離れて検出された。拳大の礫が數十個集中するもので、礫は焼けた様子は観察できない。集石内から陶器、陶質土器、焼骨等が出土した。

土壙

13-Lグリッドから第14号土壙が、13-Mグリッドから第15号土壙が3.1m離れて検出された。第14号土壙は、径0.7mの円形を呈し、深さ0.2mを測る。第15号土壙は、径0.8mの円形を呈し、深さ0.2mを測る。共に覆土は黒褐色土の單層である。出土遺物はない。

単独の甕（第14図）

西地区的中央、8-Lグリッドから検出された。振り込み等は検出されず、甕1個体分が底部を上にして斜位で単独出土した。

出土遺物（第14図）

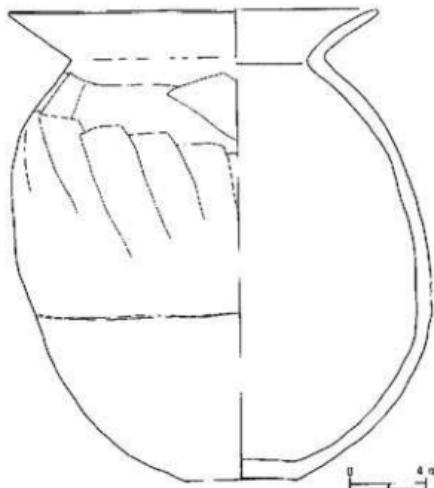
土師器甕で口縁部の大半を欠損するが全形をほのこしている。器高は24.5cm、胴部最大径は21.0cmを測る。頸部が強くくの字状に屈曲し、口縁部は外反する。頸部内側には稜を形成している。胴部下半に最大径を持つもので、器形は歪んでいる。胴部上半には縦ハケを施しているが、外面は

磨滅が著しく、整形痕は明瞭ではない。表面に輪積痕を残し、胸部中央に黒斑を残す。色調は、橙褐色を呈している。

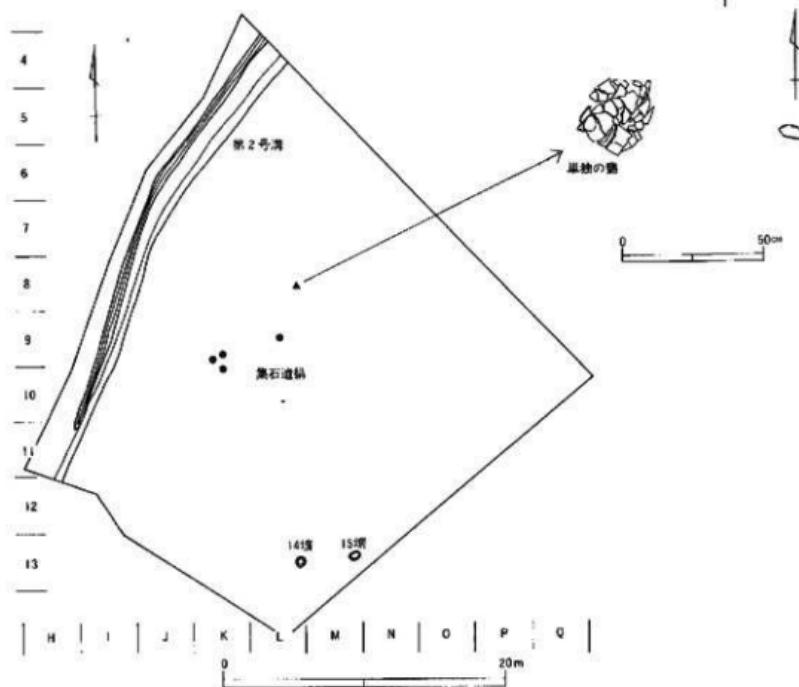
第3号溝跡（第15図）

調査区北東縁をやや南向きに曲がりながら検出された。自然堤防の北東端を画し、延長34.2mを調査した。南寄りでは幅も狭くなり、北壁は東壁よりでわずかな立ち上がりが確認された。幅は最大で2.7m、最も狭いところで0.9mを測る。断面形はなだらかな皿状を呈しており、下底面の中央に幅0.6m、深さは0.1mを測る細い溝が掘られている。溝内の土層は以下の通りである。

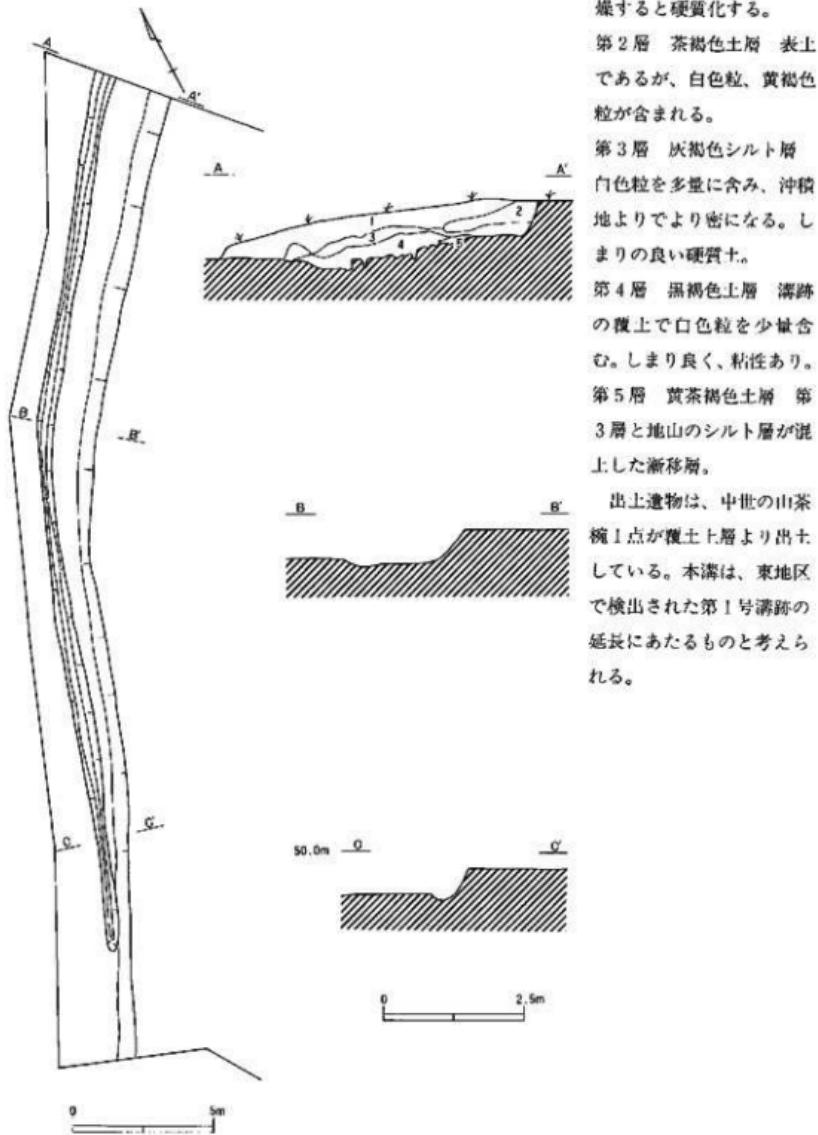
第1層 茶褐色土層 表土。シルト層で乾



出土土器実測図



第14図 大門遺跡西地区全体図



第15図 第3号溝跡実測図

IV 玉性寺跡の調査

玉性寺跡は瀬山小字馬場350番地他に所在する。大門遺跡が、北西約250 mに位置する。自然堤防上に位置しており標高は約50 m前後である。明治29年旧正月七草に焼失し、明治40年に瀬山地内にある正福寺に併せられた。正福寺には、玉性寺から移されたという大日如来像2体などが残されている。また、南東約100 mに、凝灰岩製の通称「瀬山の五輪塔」が残されており、調査区内からも中世まで遡る遺構遺物の出土が予想された。

文献では、新編武藏風土記稿（1810～1820）に「弘光寺の末、瀬照山と號す、大日を本尊とす」と記載されている。

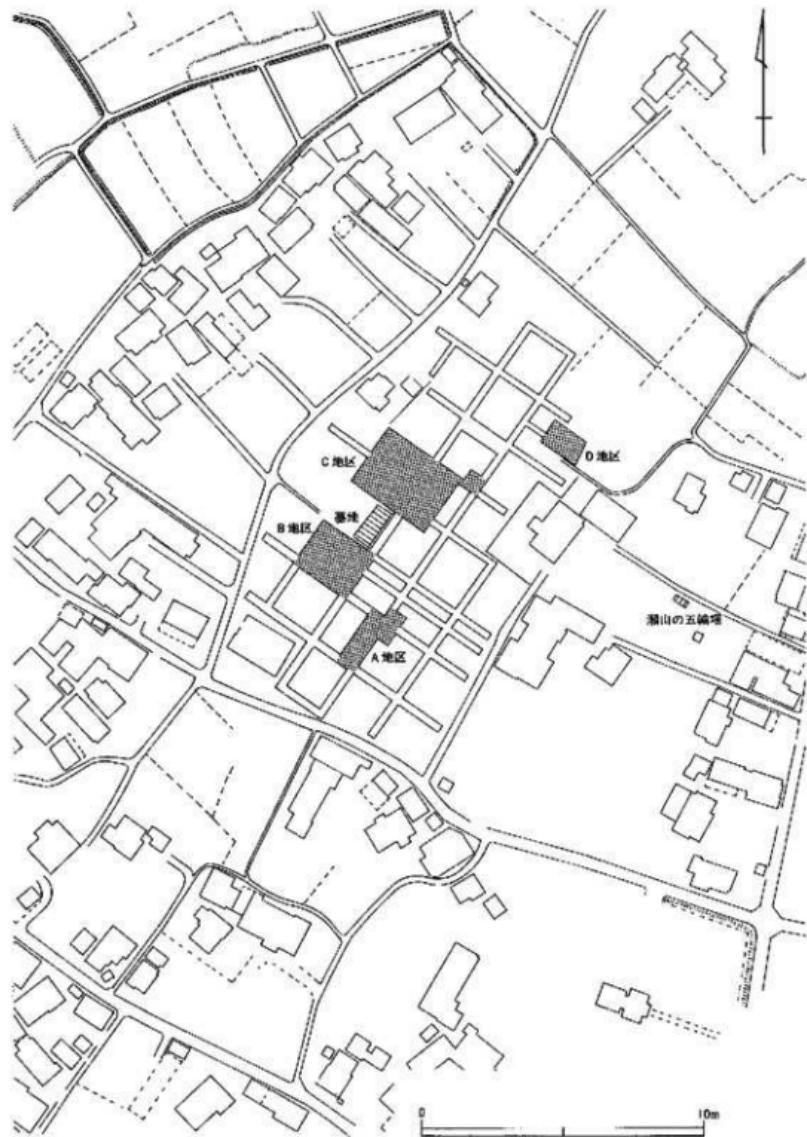
調査は約9000 m²を対象に、旧の境内の参道を基準とし20 m毎に杭を設定し、トレンチ調査を実施した。発掘調査は、遺構・遺物が特に集中して確認されたA～D地区の4地区を拡張し主に行なった。各地区で検出された遺構は、A地区から中世～近世の遺物包含層、B地区から溝跡3条、C地区から玉性寺跡の本堂、井戸、D地区から瓦捨て場である。旧本堂の前には、住職墓地が現在も残されている。また、他に多量の焼土、炭化材に瓦が混在する地点がC地区の北側と東側で2か所確認されている。

1 A地区の遺構と遺物

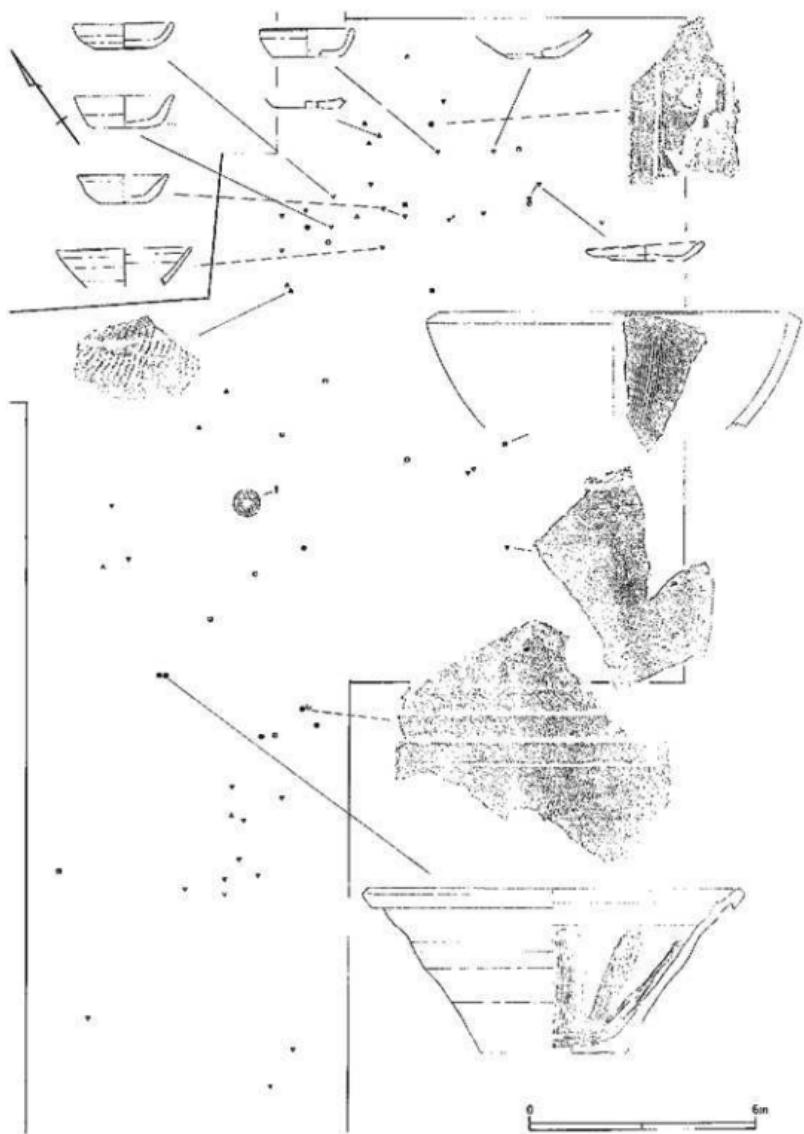
A地区は、今回の調査地区の内、最も南にあたり、B地点の南に位置する。約220 m²を拡張し調査した。中近世の遺物が、旧地表面と推定される茶褐色土から出土している。出土状況は、調査区内で散漫に分布しており、集中する地点は認められないが、北側と南側に二分できるかもしれない。出土遺物は、カワラケ、常滑窯、スリ鉢、板神片、内耳鍋、古銭、陶磁器、片口鉢等である。

カワラケ（第18図1～10）

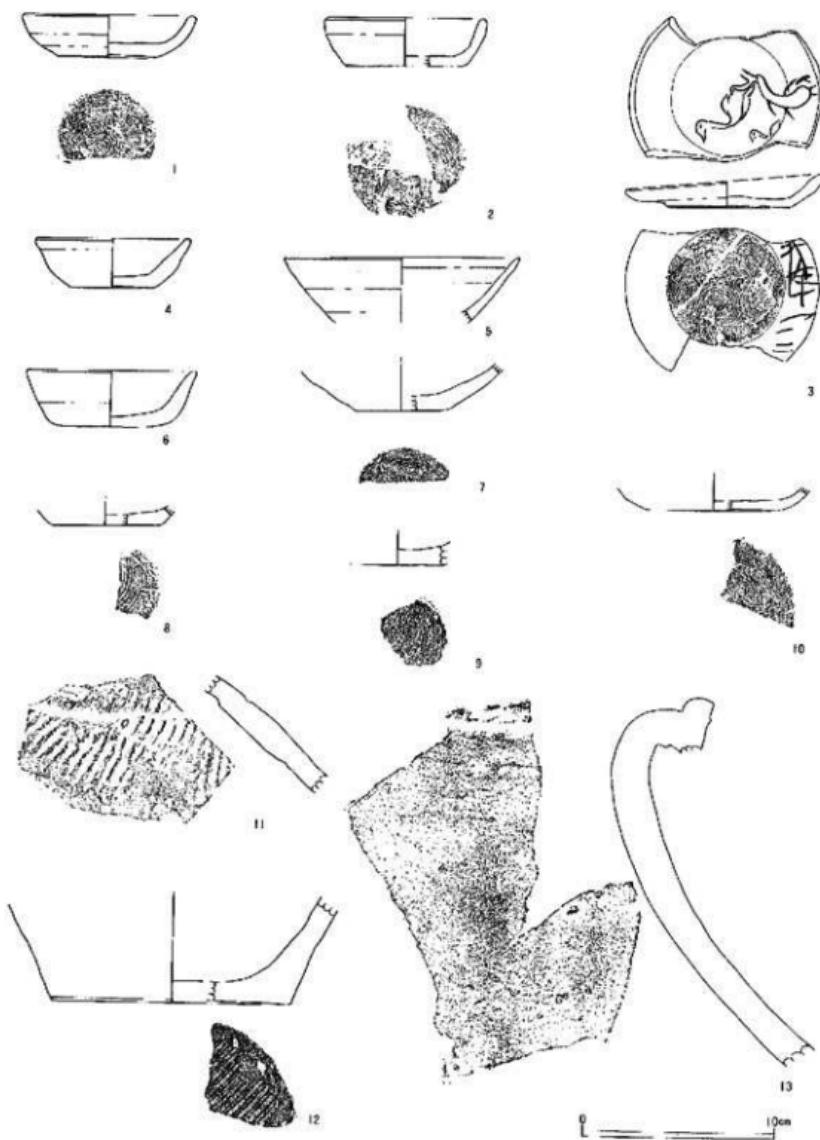
カワラケは10点が図示できた。1～5、7～10は、ロクロ整形で、6は手づくりである。1は、2分の1残存するもので、口径9.0 cm、器高2.3 cmを測る。内湾して立ち上がり、底部は糸きり底である。橙褐色を呈し、砂粒、輝石を多量に含む。2は、3分の2残存するもので、口径8.4 cm、器高2.5 cmを測る。内湾して立ち上がり、底部は糸きり底である。口縁部の一部にタール状の付着物が残され、燈明具として用いられていたと推定される。黄灰褐色を呈し、砂粒、輝石を含む。3は、3分の2残存するもので、推定口径10.3 cm、器高1.7 cmを測る。片側は皿状を呈している。内面に鶴と考えられる墨書きと外面には文字が残されている。底部は糸きり底である。橙褐色を呈し、砂粒、輝石を多量に含む。4は、4分の1残存するもので、口径8.0 cm、器高2.6 cmを測る。やや内湾して立ち上がり、底部は糸きり底である。橙褐色を呈し、砂粒、輝石を含む。5は、口縁部が6分の1残存するもので、推定口径12.1 cm、器高3.4 cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がる。黄灰褐色を呈し、砂粒、輝石を含む。6は、4分の1残存するもので、推定口径8.8 cm、器高3.0 cmを測る。口縁部は内側が削がれるように薄くなる。底部はヘラ切りである。橙褐色を呈し、砂粒、輝石を含む。7は、底部の4分の1残存するもので、推定底径4.8 cm、現高2.8 cmを測る。底部は



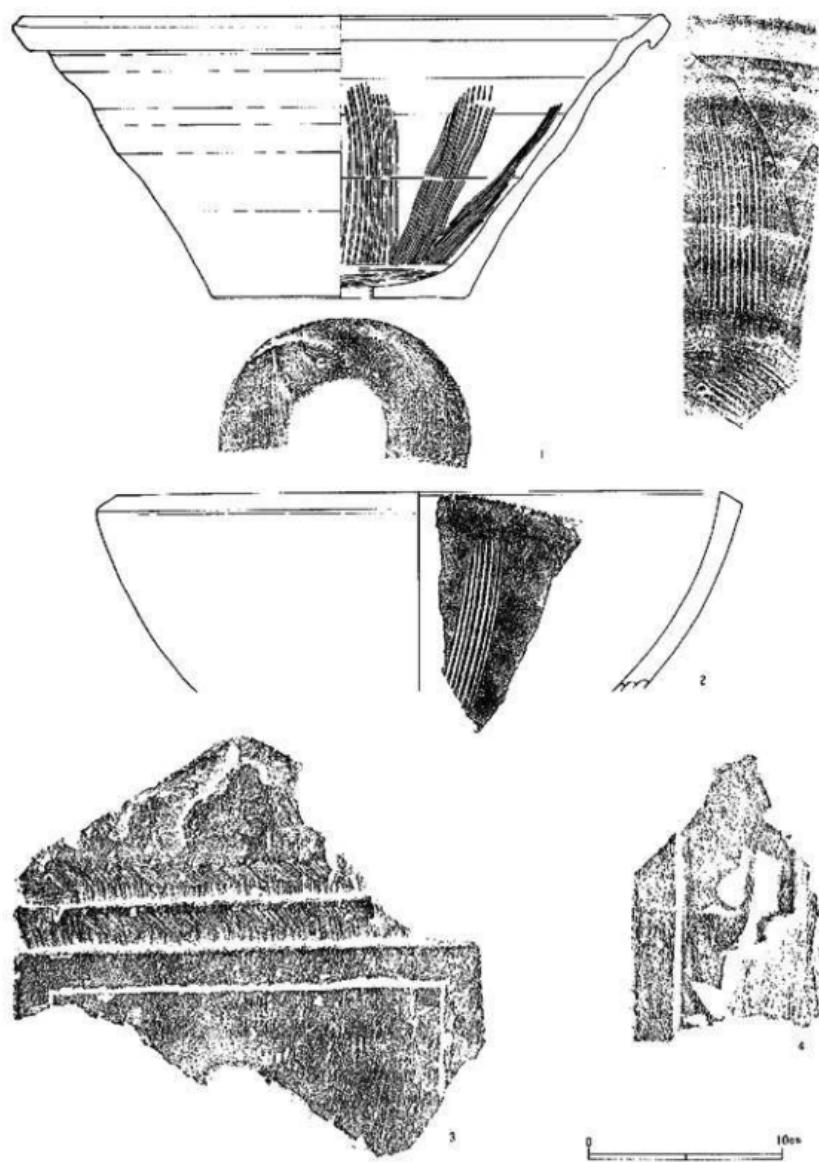
第16図 玉性寺跡全体図



第17图 玉性寺跡A地区遺物分布図



第18図 玉性寺跡A地区出土遺物実測図1



第19図 玉性寺跡A地区出土遺物実測図2

糸切りである。黄灰褐色を呈し、砂粒、輝石を含む。8は、底部の6分の1残存するもので、推定底径5.7cm、現高1.0cmを測る。底部は糸切りである。橙褐色を呈し、砂粒を含む。9は、底部の6分の1残存するもので、推定底径5.0cmを測る。底部は糸切りである。橙褐色を呈し、砂粒を含む。10は、底部の4分の1残存するもので、推定底径7.0cm、現高1.2cmを測る。底部は糸切りである。橙褐色を呈し、砂粒、輝石を含む。

陶質土器（第18図11～12）

11は、在地産の甕の肩部破片である。外面に叩き目を残し、内面は剥落している。接合痕が観察される。灰白色を呈しており、砂粒を含む。12は、在地産の甕の底部破片である。底部は、ヘラ削りである。青灰色を呈し、砂礫粒を多量に含む。

常滑甕（第18図13）

13は、常滑の大甕の破片で口縁から胴部上半の破片である。他にも数個体の破片が出土しているが図示できたものは、この1点だけである。

スリ鉢（第19図1～2）

スリ鉢は2点出土している。1は、2分の1残存するもので、推定口径34.0cm、器高14.7cmを測る。やや外反して立ち上がり、口縁が折り返し口縁となっている。内面には、11本単位の柳書きが間隔を開けて、口縁と底部の3分の2まで施されている。内面の底は擦り潰された様子が見え、柳書きが磨耗している。底部は回転糸きり底である。赤褐色を呈し、焼成は良好である。

2は、口縁の8分の1残存するもので、推定口径33.6cm、現高10.5cmを測る。やや内湾して立ち上がり、口縁は角頭状を呈している。内面に、7本単位の柳書きが間隔を開けて、口縁から施されている。灰褐色を呈し、焼成は良好である。

板碑片（第19図3～4）

板碑は、2点出土している。他に緑泥片岩数点が出土している。

3は、板碑の頭部破片で、2条の横線が施され、下位に枠線が描かれている。表面に工具痕を明瞭に残している。現存部は縦22.3cm、幅は25.2cmを測る。緑色の緑泥片岩をもちいている。4は、キリーケを残し、一条の枠線が描かれる、小形の板碑破片である。現存部は縦15.3cm、横10.2cmを測り、黒褐色の緑泥片岩をもちいている。

古銭（第20図1）

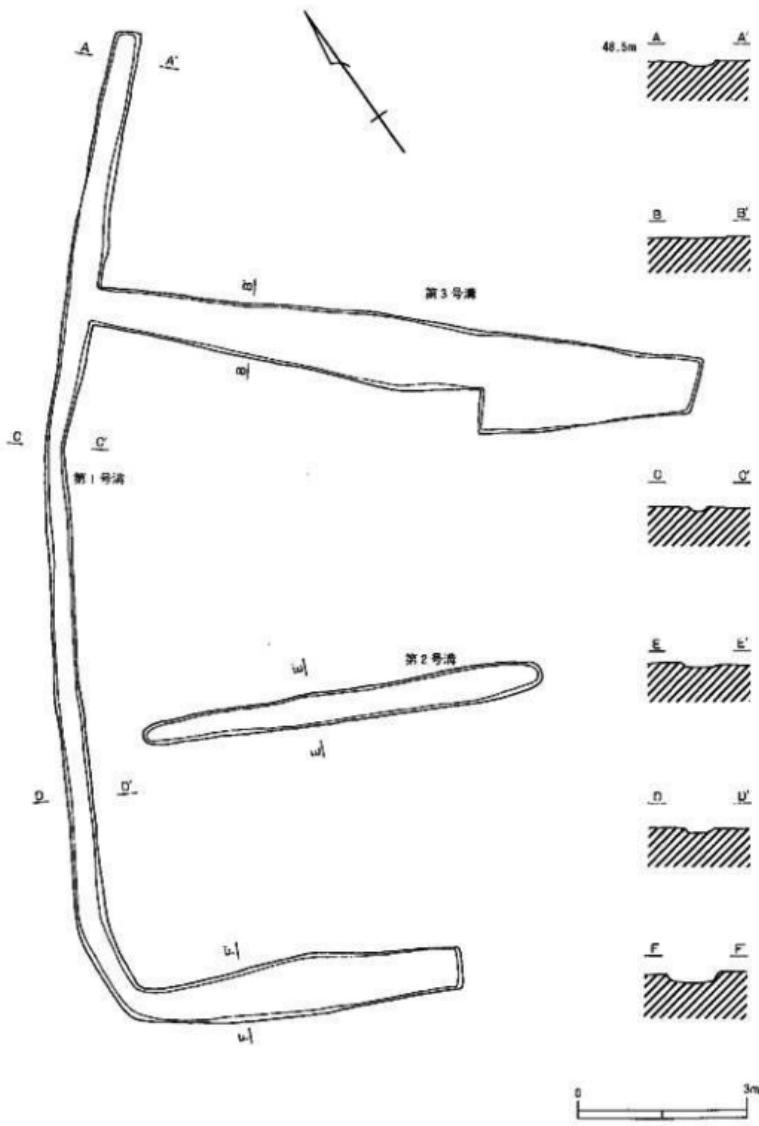
古銭は、皇宋通宝（北宋銭、初鑄1023年）1点が出土している。

2 B地区の構造と遺物

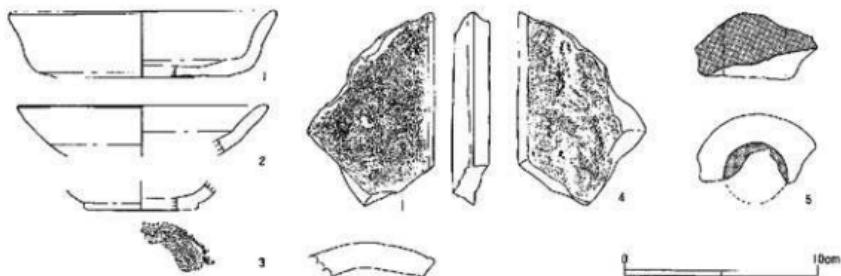
B地区は、今回の調査地区の西南にあたり、A地区的北20mに位置する。約400m²を抜張し調査した。調査地区内は西に向かい緩やかに傾斜している。遺構は、溝跡が3条で、住職墓地に接する



第20図 玉性寺跡出土古銭拓影



第21圖 玉性寺跡B地區溝跡大測圖



第22図 玉性寺跡B地区出土遺物実測図

南側から検出された。溝跡はくの字状に曲がる第1号溝とそれに直行する第2・3号溝が位置している。

第1号溝（第21図）

南北方向にのび、南で東に向かい約90度屈曲する。北端と東端は立ち上がり、消滅している。幅は0.5 mで、広いところでは1.1 mである。深さは、平均0.1 mを測る。覆土は褐色土層で焼土等は確認されず火災には直接関連はなかったと考えられる。遺物は少なく、カワラケ片、羽口片等が出土している。

第2号溝

東西方向にのび、第3号溝の南に位置する。幅は0.6 mで、西端の狭いところでは0.4 mである。深さは、平均0.1 mを測る。遺物は出土していない。

第3号溝

東西方向にのび、第2号溝の南に位置し、西北端で1号溝に交差する。幅は1.0 mで、広いところでは1.8 mである。深さは、平均1.0 mを測る。遺物は出土していない。

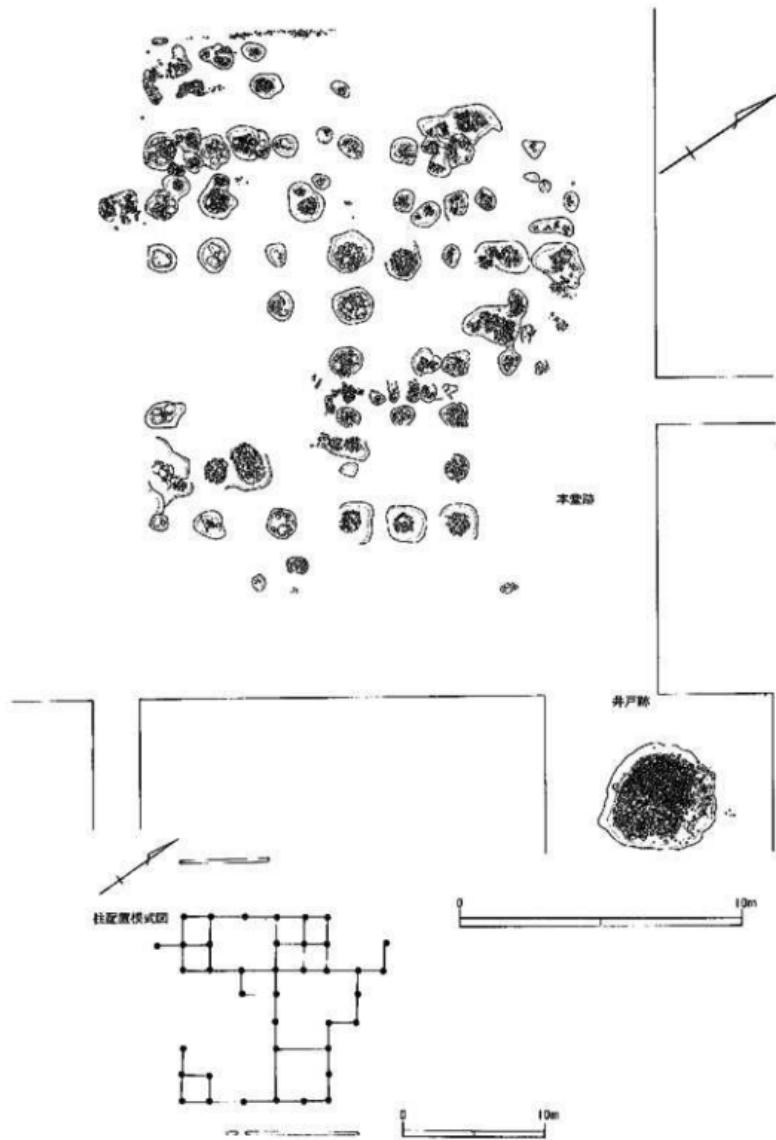
出土遺物（第21図）

遺物は、第1号溝から少數検出されているほか、溝の周辺からカワラケ、瓦等が検出されている。1～3はカワラケである。推定口径13.8 cm、器高3.4 cmを測る。口縁は外反する。橙褐色を呈し、磨減が著しい。2は、口縁部破片であり推定口径12.9 cm、器高2.6 cmを測る。橙褐色を呈し、磨減が著しい。3は、底部破片で糸引き底である。赤褐色を呈し、砂粒、輝石を含む。

4は平瓦破片である。現存部は縦10.0 cm、幅は6.5 cm、厚さ1.3 cmを測る。内面に布目を残す。灰褐色を呈する。5はふいごの羽口破片である。先端部の破片で内面の径は3.2 cmを測る。外面に鉄が付着している（網部分）。第1号溝コーナーの覆土上層から出土した。

3 C地区の遺構と遺物

C地区は、今回の調査地区のほぼ中央にあたり、B地区の北東20 mに位置する。遺構としては、玉性寺の本堂跡の基礎石列が検出された。また、東に10 mに井戸跡がある。



第23図 玉性寺跡C地区本堂跡・井戸跡実測図

本堂跡（第23図）

井戸跡の西10 mに位置しており、20×17 mの範囲から柱の根石（礎石）と雨垂れ溝が発見された。柱の根石は、約径1.5 m、深さ0.2 mの掘り込みに河原石を敷き詰めたものである。根石には30 cm大の偏平石1個を据えたものや20 cmから10 cmの河原石数10個詰めたものなどがある。柱の間隔は、約1.8 mである。雨垂れ溝は東縁と西縁で確認され、幅0.2 m、深さ0.1 mで中には径3 cm大の礎が詰まっていた。周辺から瓦の小破片が少量出土している。本堂の南10 mには、玉性寺の住職墓地が現存している。

井戸跡（第23図）

本堂跡の東南10 mに位置している。径3.8 mの範囲にあり、瓦、河原石で埋めもどされていた。井戸枠の幅は2.5 mで掘り方との間は礎で埋めもどされている。深さは1 m迄掘り下げたところ、底まで達せず不明である。遺物としては他にガラス容器などが出土している。

4 D地区の遺構と遺物

D地区は、今回の調査地区の東北にあたり、C地区的東30 mに位置する。約120 m²を拡張し調査した。調査地区内は東に向かう傾斜地に位置している。

瓦捨て場（第24図）

瓦捨て場は、傾斜地上の11.5×6.1 m、深さ0.8 mの鍵子状の掘り込みの中から密に瓦と礎を充填した状態で検出された。特に東の6 m×5.9 mの方形部分に遺物は集中していた。層序は第1層が焼土層で層厚0.1 mを測り無遺物層である。第2層が瓦を密に含む層で深いところで0.7 mを測る。この場所は、明治29年の火災の後片付けの先と考えられ、池か沼を埋め立てたものと考えられる。

出土遺物（第25～31図）

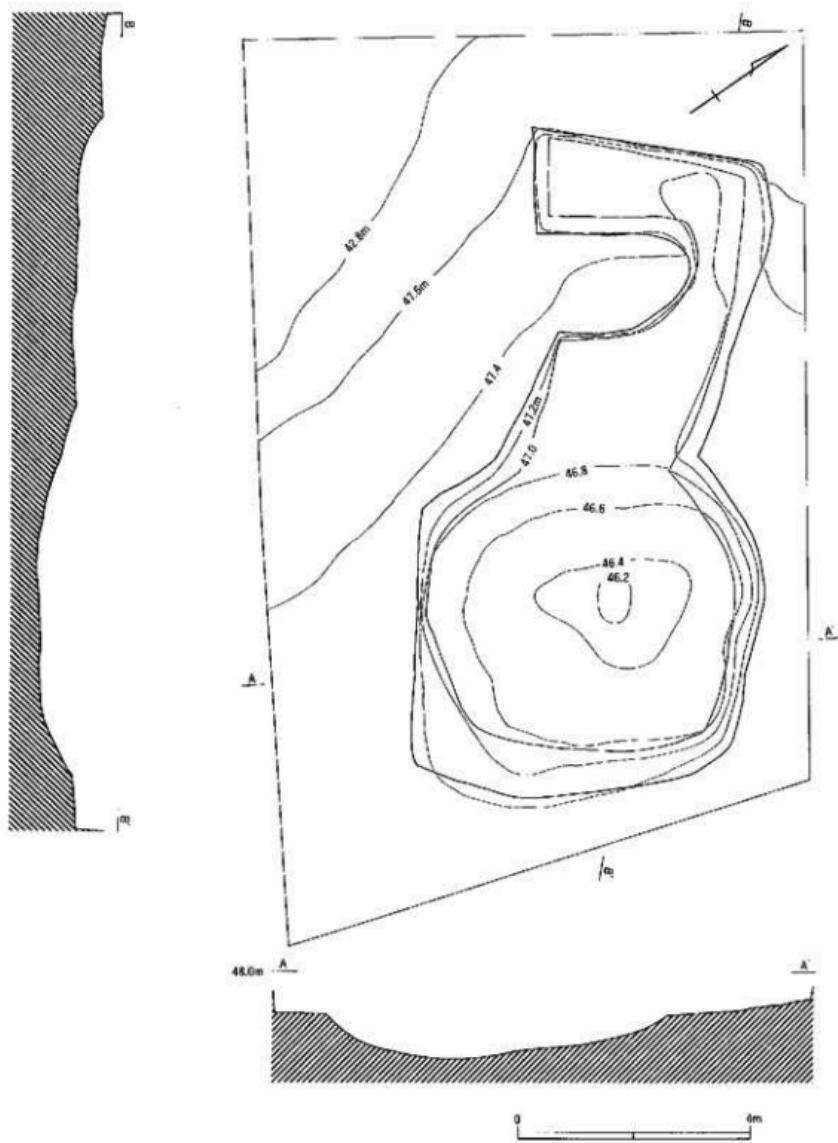
出土した遺物は、極めて多量にある。種別にみると、陶磁器・スリ鉢・内耳鉢・火鉢・瓦・金属製品・鏡・石臼・古銭・ガラス製品・炭化材等である。これらに混在して打製石斧2点が出土している。以下、主なものを種類別に記載していく。

陶磁器（第25図1～3）

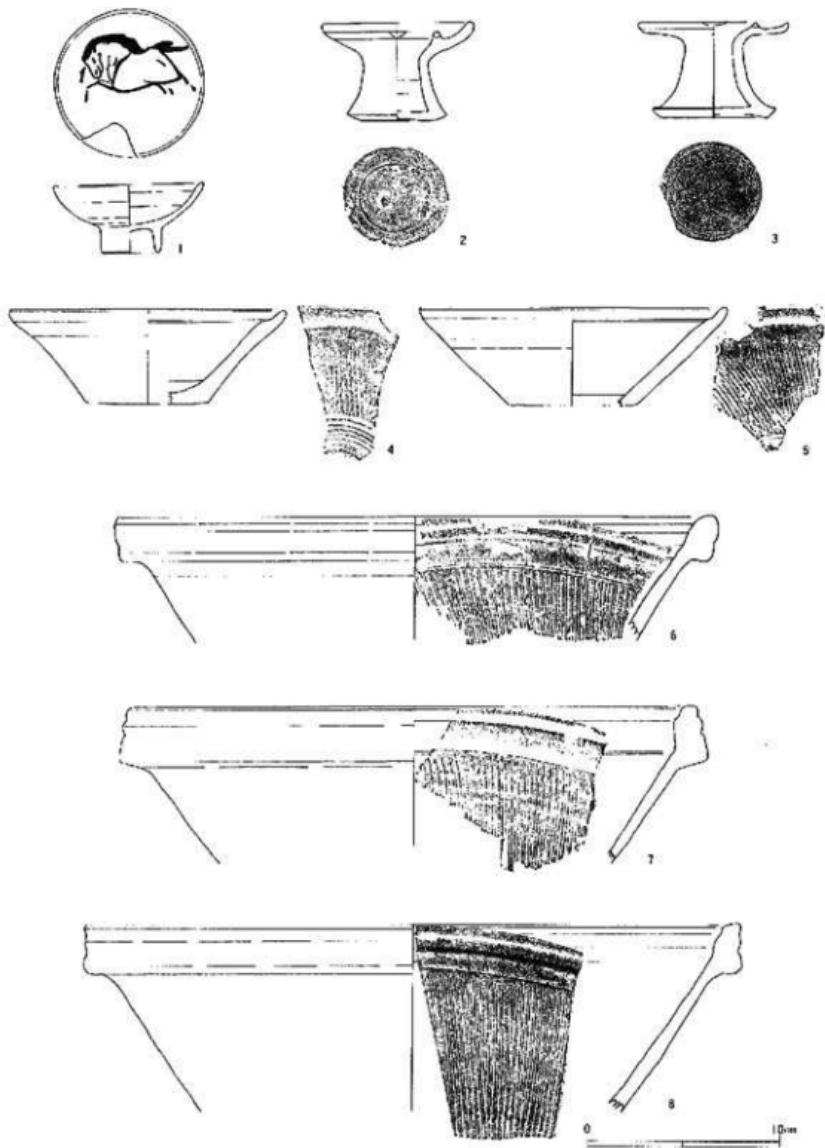
陶磁器は、碗、皿、鉢、杯、灯明具等多くの種類が出上している。そのうち3点を掲示した。第1は、相馬焼の杯（さかずき）である。口縁の一部を欠損している。口径7.8 cm、器高3.5 cmで、馬の絵が描かれている。茶褐色を呈している。2、3は、灯明具である。口縁部の内側に受けを廻らしたもので、脚部が容器となり油を蓄えることができる。瀬戸美濃系のものと考えられ、2は口径7.8 cm、器高5.0 cmを測り、底部が糸きり底である。3は口径7.7 cm、器高5.0 cmを測り、受けの一部を欠損している。ともに模などの付着は認められない。

スリ鉢（第25図4～8、第26図1～2）

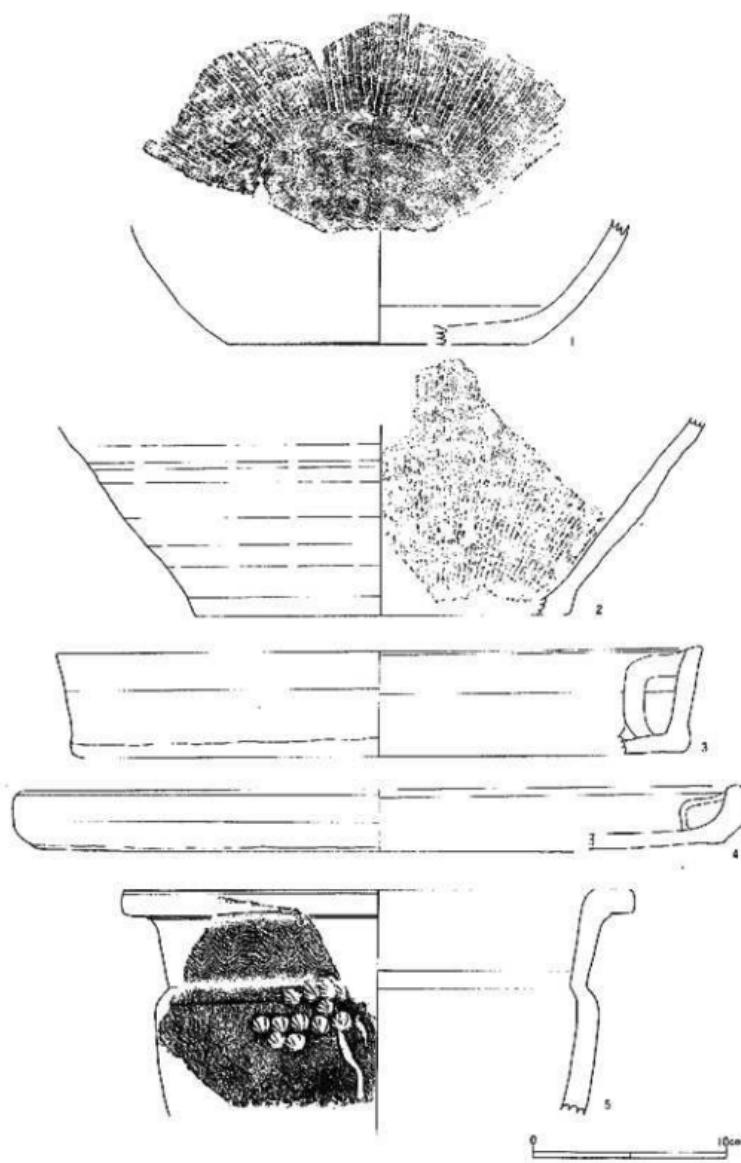
スリ鉢は、器高15 cm程度の小形品と30 cm程度の大形品がある。第26図2を除き外面には鉄輪が施されており、内側全面に6～10単位の条線を密に施している。第25図4、5は小形のスリ鉢である。4は推定口径14.3 cm、器高4.9 cmを測る。5は口径15.9 cm、器高5.1 cmを測る。6～8は、口縁部破片で、すべて折り返し口縁となっている。6は推定口径31.4 cm、器高6.4 cm、7は推定口



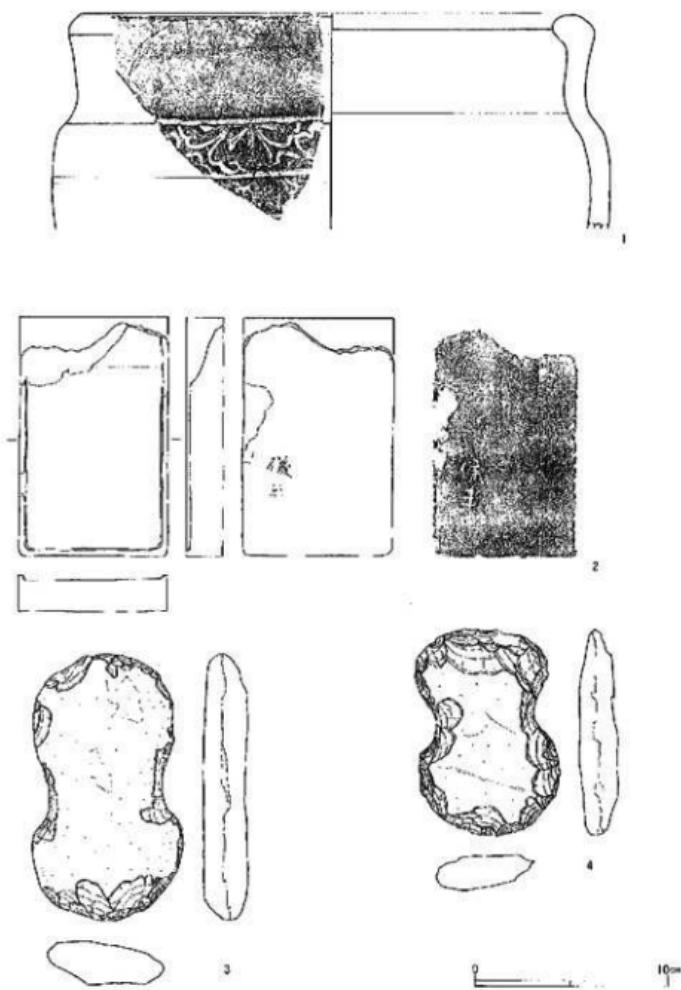
第24図 玉性寺跡D地区遺構実測図



第25図 玉性寺跡D地区出土遺物実測図1



第26図 土性寺跡D地区出土遺物実測図 2



第27図 玉性寺跡D地区出土遺物実測図 3

径29.7 cm、器高8.2 cm、8は推定口徑34.2 cm、器高9.7 cmを測る。第26図1、2は底部よりの破片である。1は推定底径15.6 cm、器高6.4 cm、2は常滑窯と考えられ、推定口徑19.4 cm、器高10.0 cmを測る。

内耳鍋（第26図3～4）

素焼きの土鍋であり、内耳が設けられている。3は、推定口徑33.5 cm、器高5.5 cmを測る。4は推定口徑38.0 cm、器高3.2 cmを測る。

火鉢（第26図5～第27図1）

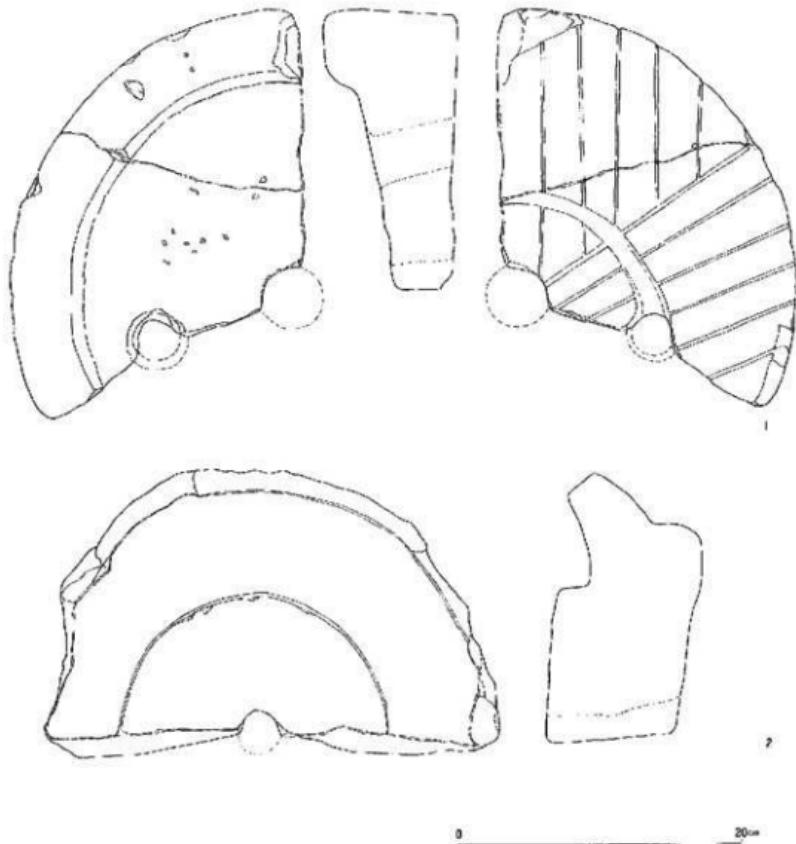
5は、推定口径26.6cm、器高11.8cmを測る。松の木の模様を彫り込んでいる。第27図1は推定口径26.0cm、器高11.3cmを測る。唐草文を彫り込んでいる。ともに瓦質のもので、1は赤褐色、2は外面が黒色で光沢を有している。堅く焼かれている。

金属製品（第20図2）

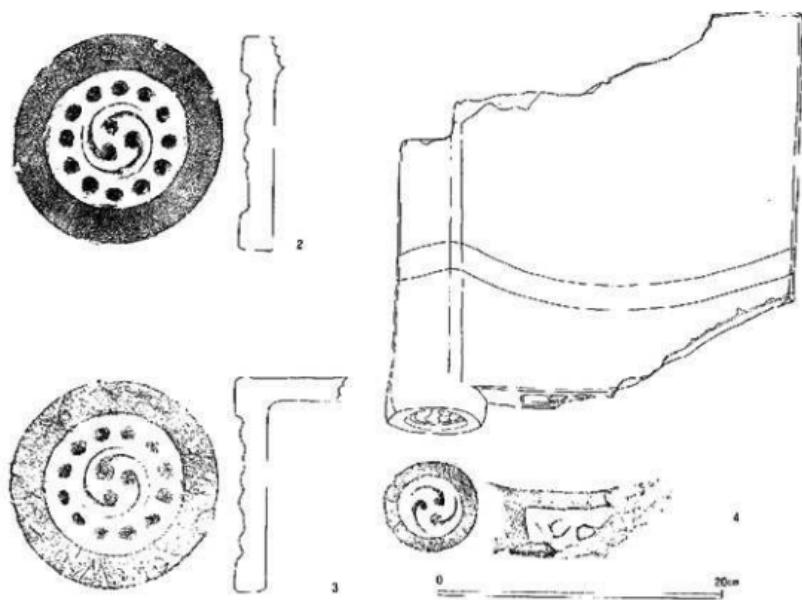
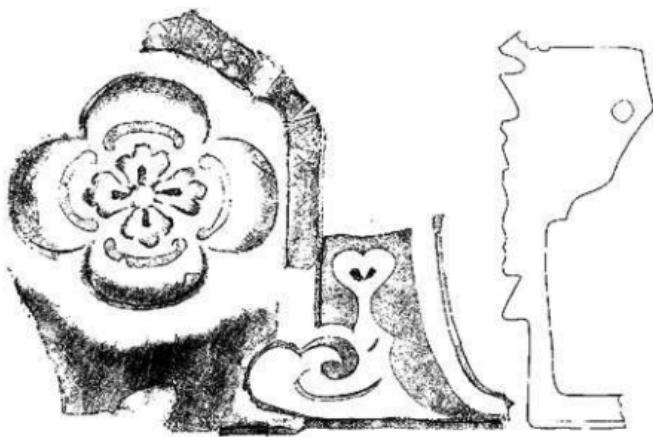
金属製品には、古鉄、銅挽、瓦釘、鐵錐等がある。古鉄は、寛永通宝1点（第20図2）が出土している。瓦釘は、銅製の角釘で長さ10cm、太さ0.3cmを測る（図版27）。

硯（第27図2）

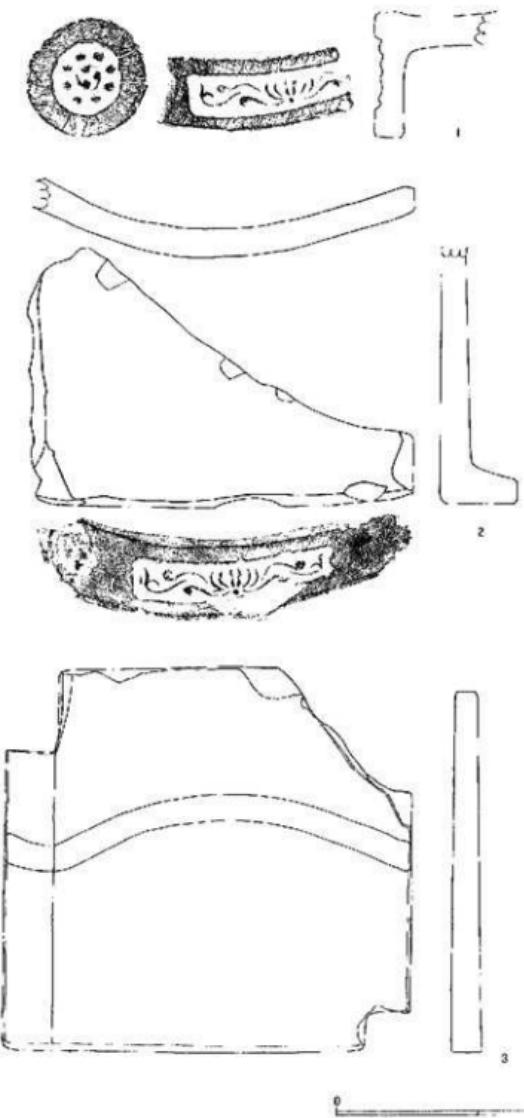
硯は、長さ12.2cm、幅7.7cm、厚さ1.9cmで一端を欠損している。裏面に「儀三」と刻銘されている。材質は、粘板岩製である。



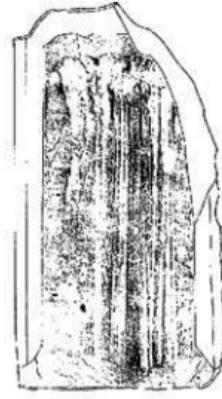
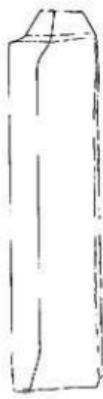
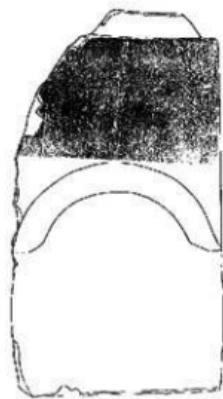
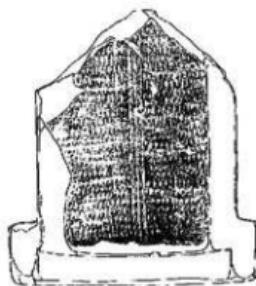
第28図 玉性寺跡D地区出土遺物実測図4



第29圖 玉性寺跡D地区出土遺物実測図 5



第30図 玉性寺跡D地区出土遺物実測図 6



0 20cm

第31図 王性寺跡D地区出土遺物実測図 7

石臼（第31図）

1は、上臼で全体の4分の1の残存である。直徑40.0 cm、最大厚9.5 cm、最小厚4.3 cmを測り、安山岩製である。下面に格子に溝が刻まれ、中央に軸棒を差す穴との間に取手を差す穴がある。2は、下臼で2分の1の残存である。上面は磨滅している。直徑36.0 cm、最大厚9.5 cm、最小厚7.8 cmを測り、安山岩製である。

打製石斧（第27図3、4）

打製石斧が瓦や石に混在して2点出土している。刃部の磨滅がひどく、他の場所で拾われここまで逃げられたものと推測される。3は13.9 cm×7.8 cmで砂岩製、4は10.7 cm×7.3 cmで凝灰岩製である。

瓦（第28～30図）

瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、竹瓦、半瓦、鬼瓦等がある。軒丸瓦（第28図2～3）は、径15.0 cmで左巻の三ともえ文で周囲に16個の珠文が配置されている。なかに、「万世山」の刻印を残すものがある。軒平瓦（第29図4、第30図1、2）は、軒丸部に三ともえ文を軒平部に唐草文を配している。半瓦（第30図3）は、長さ27.5 cm前後、幅28.7 cm前後、厚さ1.9 cm前後である。竹瓦（第31図1～3）は、長さ27 cm前後、径14 cm前後、厚さ6 cm前後のものである。瓦の内側には糸目を残すものと削り痕を残すものの2種類ある。また、吊り穴を残すものもある。鬼瓦（第29図1）は、花弁を表出したもので吊り穴と考えられる穴を残している。

V 道祖神遺跡の調査

道祖神遺跡南地区は、微高地のほぼ中央に立地しており、大門遺跡の南西400 mに位置している。調査は、造構の広がりを確認するため、約2000 m²を対象にトレンチ調査を実施した。そのうち500 m²を拡張調査し、6基の土壙と少量の土師器小片と近世のキセルの吸い口などが検出された。図示出来る遺物は無い。

第1号土壙

調査区南東隅から検出された。形態は径1.0 mの円形を呈し、深さ0.2 mを測る。断面は皿状を呈し、覆土は、上層が黒灰褐色の砂質土で粘性があり、下層は黒色の砂質土層で粘性は弱い。遺物は出土していない。

第2号土壙

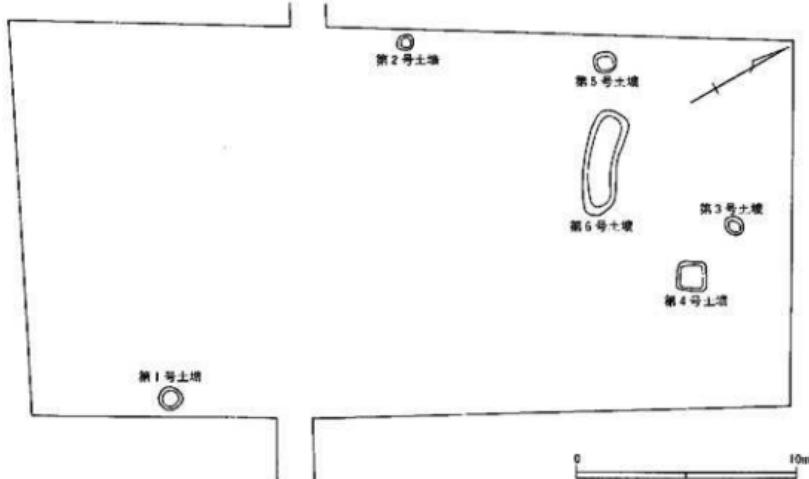
調査区東壁際中央から検出された。形態は径0.6 mの円形を呈し、深さ0.2 mを測る。断面は皿状を呈し、覆土は灰褐色土の單層で、焼土・炭化粒をわずかに含む。遺物は出土していない。

第3号土壙

調査区東壁際から検出された。形態は径0.7 mの円形を呈し、深さ0.1 mを測る。断面は皿状を呈し、覆土は灰褐色土の單層で、焼土・炭化粒をわずかに含む。遺物は土師器細片2が出土している。

第4号土壙

調査区北東隅から検出された。形態は一辺1.2 mの方形を呈し、深さ0.2 mを測る。断面は箱状を



第32図 道祖神遺跡全体図

呈し、覆土は黒灰褐色上の単層で、炭化粒を少量含む。遺物は出土していない。

第5号土塚

調査区東壁際中央から検出された。形態は径1.0mの円形を呈し、深さ0.2mを測る。断面は皿状を呈し、覆土は灰褐色上の単層で、焼土・炭化粒をわずかに含む。遺物は出土していない。

第6号土塚

調査区中央北半から検出された。形態は長辺5.0m、幅1.5mの溝状の楕円形を呈し、深さ0.1mを測る。断面は皿状を呈し、覆土は灰褐色上の単層で、焼土・炭化粒を含む。遺物は出土していない。

VI 道祖神塚の調査

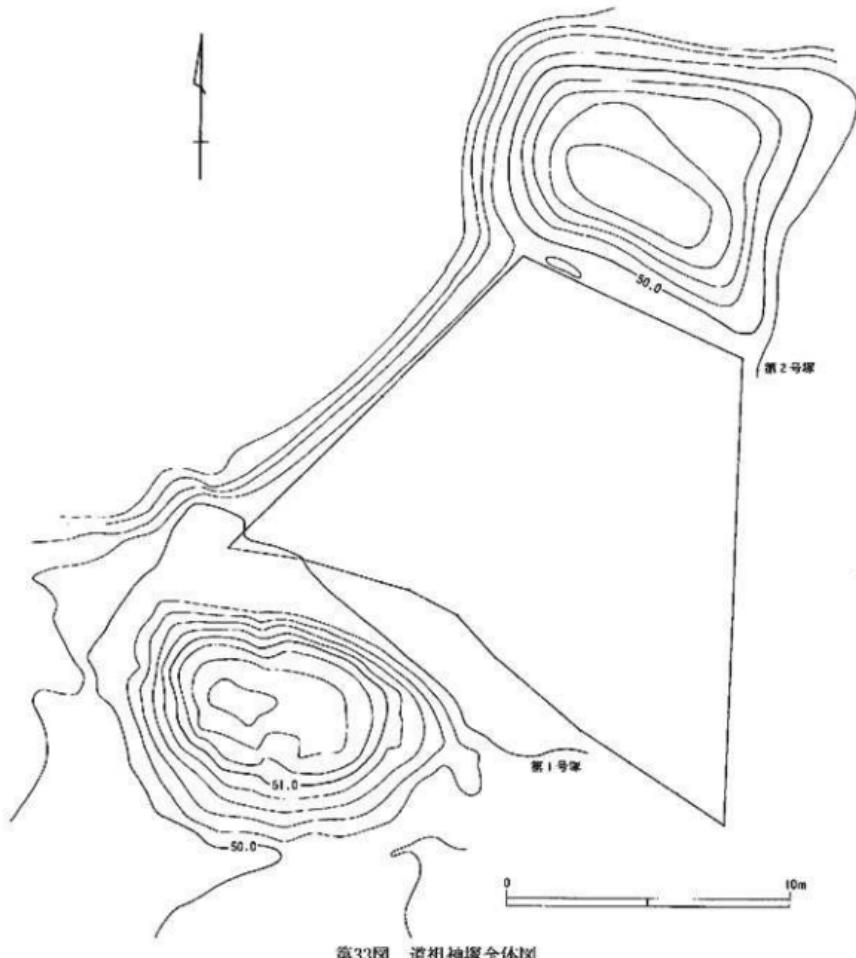
道祖神遺跡北地区では、微高地の縁辺に立地する2基の塚が調査対象になった。大門遺跡の南180m、道祖神遺跡の北140mに位置している。調査はトレンチ調査により、土層確認を行い調査を実施した。

1 第1号塚（第34図）

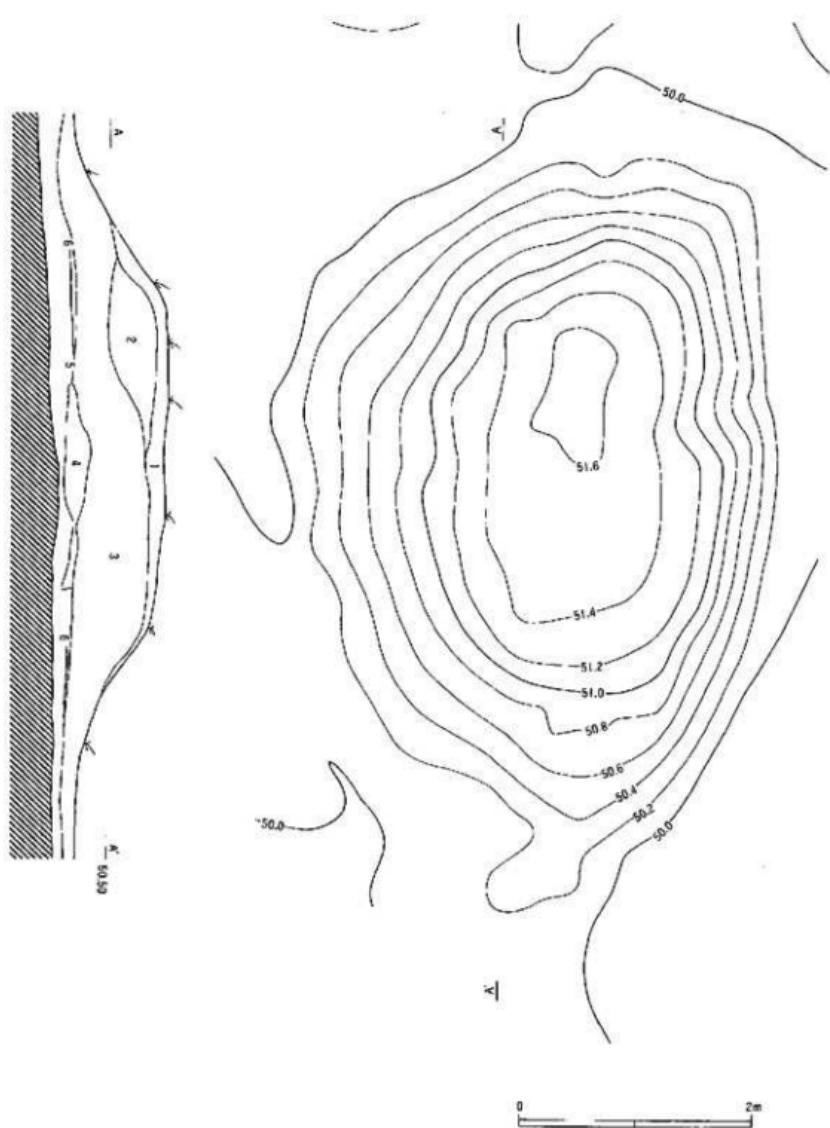
第1号塚は、第2号塚の内16mに位置し、長辺12.0m、短辺8.0mの楕円形を呈し、高さ1.8mを測る塚頂部には平坦で、北側の一部が道のため削平されている。上層は、基盤の褐色シルト層の上に径1~10cmの大河原礫が積まれている。基盤の褐色シルト層の最上部には浅間山の火山灰(天明3年噴出)が平均5mm程度の厚さで連続して確認された。遺物は、基底から陶器片1が出土しただけである。

第1号塚上層

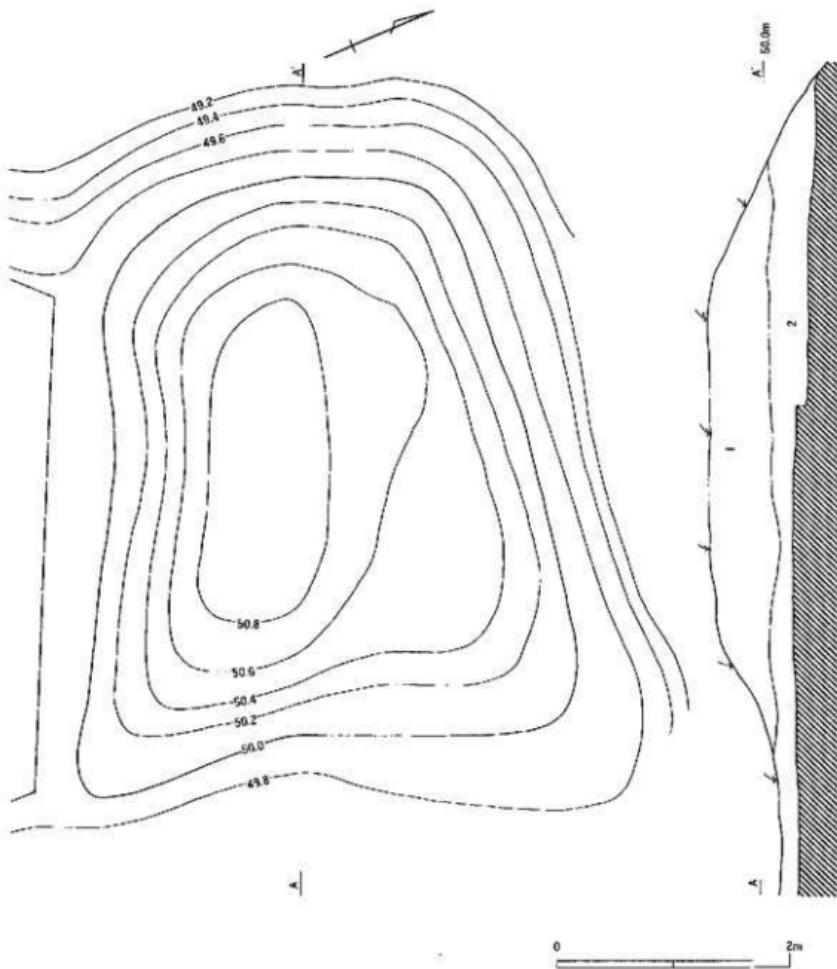
- 第1層 黒褐色土層 表上層で、径1 cm 大の礫を含み、しまり粘性無し。
- 第2層 茶褐色土層 径1 ~ 5 cm 大の礫を多量に含む混土層。しまり粘性無し。
- 第3層 褐色礫層 径1 ~ 3 cm 大の礫を密に含み、しまり良好。
- 第4層 褐色礫層 径1 ~ 10 cm 大の礫を密に含み、しまり良好。
- 第5層 灰色シルト層 地山のシルト層である。
- 第6層 褐色ハミス層 火山灰層で、第5層の最上部に最大5 mm ほどでレンズ状に径1 mm 以下の粗い粒子が堆積する。



第33図 道祖神塚全体図



第34図 道祖神第1号塚実測図



第35図 道祖神第2号塚実測図

2 第2号塚（第35図）

第2号塚は、第1号塚の東16mに位置し、長辺12.0m、短辺9.0mの方形を呈し、高さ1.8mを測る。塚頂部は平坦で、横瀬家の墓石等が残されていた。西側の一部が道のため削平されている。上層は、基盤の褐色シルト層の上に径1~10cm大の河原疊が積まれている。この基盤の褐色シルト

層の上部から人骨片がまとめて出土しており、併出して六文銭が出土している。第2号塚では浅間山の火山灰は確認されなかった。遺物は上記以外検出されなかった。

第2号塚土層

第1層 褐色礫層 径1~10cm 大の礫を密に含む砂質土層。しまり良好。

第2層 灰色シルト層 地中のシルト層である。人骨などが包含されている。80cm程の層厚で礫層に達する。

3 道祖神第1号塚におけるテフラ分析報告

パリノサーベイ株式会社

1.はじめに

瀬山道祖神遺跡は、川本町をほぼ南北に二分するように東西方向に流れる荒川の北側の沖積低地上に位置する。遺跡には、河原石を多量に含む盛土で造られた塚（瀬山道祖神第1号塚）がある。これまでの調査により、塚の構築された当時の地表面直上にテフラと考えられる堆積物が認められた。

本分析では、この堆積物がテフラであるかどうかの確認を行い、テフラであれば、すでに噴出年代の知られている示標テフラとの対比を行うこととする。示標テフラとの対比は、塚の構築年代を検討する資料が得られるものと考える。

2.試料

試料は、瀬山道祖神第1号塚の盛土直下の旧表土层上面に認められた薄いレンズ状の堆積物である。堆積物は、粗砂～極粗砂径の砂からなる。

3.分析方法

試料を適量とり、小型超音波洗浄装置により分散して泥分を流し去る。これを数回繰り返し、得られた砂分を実体鏡下で観察した。

4.分析結果

試料は、多量の軽石と遊離結晶からなる。のことから、試料となった砂質堆積物は、テフラの純層であると考えられる。次に軽石と結晶の特徴を以下に示す。軽石は、最大径約2mmで灰白色から淡灰褐色を呈し、非常によく発泡している。中には纖維状に伸びた泡を持つものも認められた。また、斜方輝石の斑晶を有するものも認められた。遊離結晶は、多量の斜長石と斜方輝石および比較的少量の單斜輝石から構成される。これらの特徴からこのテフラは、A.D.1783年（天明3年）に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A：荒井、1979）に対比される。

5.塚の構築年代について

本分析より、瀬山道祖神第1号塚は、As-A降灰以降に構築されたと考えられる。さらに、As-Aの純層が比較的よく保存されている状況を降灰後そう長い時間を経ず塚の盛土がなされたためと考えるならば、塚はA.D.1783年以降で、かつそれに比較的近い年代に構築された可能性もある。

文献

新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル、157、p.41~52。

VII 結び

瀬山遺跡群の発掘調査は、大門遺跡、玉性寺跡、道祖神遺跡、道祖神塚の4地点の調査を実施した。その結果、古墳時代後期から奈良・平安時代の集落の調査（大門遺跡）、中近世の寺院跡と塚等の調査（玉性寺跡、道祖神遺跡、道祖神塚）等新たな知見が多く得られた。ここで各時期の概要とその地域的な位置づけを行いたい。

1 古墳時代後期から奈良・平安時代の集落

大門遺跡から発見された古墳時代から奈良・平安時代の遺構は、低地への進出過程を考える上で興味深いものがある。古墳時代後期の土師器は、第1、2号土器集中地点から検出されている。第1号土器集中地点からは甕2点と壺が出土しており、ともに6世紀後半に位置づけられる。第2号土器集中地点からは、6世紀前葉から中葉の有段の壺・小形壺とともに、8世紀まで下ると考えられる甕等が混在して検出された。なかでも台付甕は、頸部に強い稜を有するもので、6～7世紀代と考えられる。奈良時代以降に盛行する台付甕の初源形態として注目される。同時期の住居などの遺構は検出されず、荒川の流路が南にそれ、開発が出来るようになったため、台地下に水田耕作を行うため進出した人々の行動の跡と考えられる。

奈良・平安時代の住居跡は、東地区から4軒検出された。住居跡は調査区南側の2軒（第1・2号住居跡）と北側の2軒（第3・4号住居跡）の2グループに分けられる。南側のグループは、土師器壺を主体とし、8世紀代に位置づけられる。北のグループは、須恵器壺を主体とし、9世紀代に位置づけられる。遺物の出土量が少なく出土遺物からの細分は難しいが、住居の主軸方向は2号と3号が同軸でありさらに細分されるものと考えられる。また、東の傾斜地から検出された第3号土器集中地点から出土した須恵器壺は、土師質のものであり10世紀代に位置づけられるものと考えられる。大門遺跡から出土した須恵器は砂礫を多量に含むものが多く、白色針状物質を含むものは確認されず、明らかな北企窓産は見当たらなく、末野窓産のものが主体であると考えられる。

この集落は、遺構密度は低いが古墳時代後期から断続的に10世紀代まで営まれたものと考えられ、耕作を求めて進出してきた人々の生活の跡と推定される。また、第1号溝跡から出土した羽口と鉄鋤は、約4m程の範囲に集中しており、一括廃棄されたものと考えられ、周辺に製鉄（小鍛冶）に^(註1)関連する遺構の存在が推定される。これらと伴出した土師器は小破片のものが多いが、8世紀代の特徴を有し、集落との関連が想定される。

周辺の古墳時代後期から奈良・平安時代の遺跡分布は櫛引台地上では熊谷低地を望む崖線ぞいに分布しているが崖線から奥に入ると稀薄になる。また低地上では、瀬山遺跡群の位置は、荒川の氾濫原である熊谷低地の扇頂部に位置しており、下流には東西方向に発達した自然堤防が島状に分布し、この自然堤防上に古墳時代以降の遺跡が形成されている。

個々の遺跡を見ていくと、櫛引台地上では、三ヶ尻遺跡で古墳後期の住居が古墳群と分布を別にして検出されている。^(註2)籠原裏遺跡では奈良・平安時代の住居が古墳群と重複して検出されている。^(註3)

低地では8世紀代から出現する集落が多く、上辻・下辻遺跡では奈良・平安時代の住居跡49軒が発掘されている。古墳中期の住居1軒も発見されている。樋の上遺跡からは奈良・平安時代の住居56軒と掘立柱建物跡等が検出されている。上辻・下辻遺跡と樋の上遺跡は連続する遺跡と考えられ、かなり大規模な集落を形成していたものと推定される。新ガ谷戸遺跡では、古墳時代後期から奈良平安時代の住居7軒が古墳群と分布を別にして検出されている。また、宮塚古墳群や石原古墳群等が自然堤防上に分布しており、未知の遺跡が存在することが予想される。

瀬山遺跡の位置は古代橿沢郡と幡羅郡の境に位置すると推定され、荒川の左岸の遺跡は、瀬山から見て下流に多く、上流の遺跡分布は稀薄であり、幡羅郡の最西南端の地域に当たると想定される。橿沢郡の遺跡は岡部町周辺に集中しており、遺跡分布の集中の在り方を検討することにより、律令制下の領域が復元されると考えられる。

2 中近世の調査の成果

中近世の調査は、玉性寺跡、道祖神遺跡、道祖神塚で実施され、大門遺跡からも遺構・遺物が検出されている。瀬山地内には、瀬山の五輪塔が残され、特に近接する玉性寺跡の調査は中世に遡る遺構・遺物の発見が期待された。

玉性寺跡は、創建期は不明であるが、江戸時代の文献に記載され、明治29年に焼失するまで存続していた。調査は、遺構・遺物の集中する4地点で主に実施された。A地区からは、遺構は検出されなかったが、中世～近世前半の遺物が出土した。B地区からは溝跡が検出され、その周辺から中世～近世初頭に位置づけられるカワラケや布目瓦や羽口片が出土しており、A地区的遺物と共に玉性寺の創建を考える上で興味深い資料といえる。

C地区からは焼失時の本堂跡と井戸跡が検出され、また、D地区からは火災の後跡片付けをした瓦捨て場が発見されている。瓦捨て場からは多量の陶磁器や瓦等が出土しているが、近世後半から明治初頭にかけてのものである。瓦は、刻印「万世山」を有するものがあり、瀬山地内で製作された可能性がある。

近世の遺跡の調査例は周辺では少なく、類例としては、江南町常安寺館の調査がある。部分的な調査であったが寺に伴うと考えられる畠状の土壇から近世から近代の陶磁器類が出土している。周辺は中世館跡で、堀、土塁、遺物の出土が確認されている。中世館跡に近世寺院を創建する例は多く、川本町田中に所在する坂之内館なども同様である。玉性寺跡では、館に関係する遺構は検出されてはいないが近接する五輪塔の所在もあり、同様の変遷を持つ可能性が類推される。今後周辺で当該期の調査例が増加することで解明されることが期待される。本遺跡の調査は良好な1事例となるものと考えられる。

道祖神で調査された塚のうち第2号塚は墓地として位置づけられる。第1号塚は遺物の出土もなく、地名に由来する伝承なども残されてなかった。構築面直下から天明の火山灰が検出され、塚の構築された上限は明らかである。東1.2kmにある熊谷市庚申塚は、同規模の近世塚であるが、塚の斜面で天明の火山灰が検出されており、噴火前に構築されたものと指摘されている。遺物も出土しており、いわゆる庚申塚と考えられる。道祖神第1号塚は、遺物の出土もなく、性格は不明ではある。

るが、火山噴火の後、耕地を復興するために生じた石などをかき集めた石塚と推定される。

- (註1) 大門遺跡の東北400mのハケ下にある薬師堂は別称「たら堂」と呼ばれ、製鉄との関連がうかがわれる。
- (註2) 「三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)」1983 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (註3) 熊谷市教育委員会が昭和61~平成元年調査実施。金子正之氏より教示。
- (註4) 「下辻遺跡」1987 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (註5) 「橋の上」1986 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (註6) 「新力谷戸」1982 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (註7) 濑山地区の東北隅にあたる薬師堂付近には、昭和初期まで瓦を焼いていた窯が残っていた。馬場敬次氏より教示。
- (註8) 「坂西遺跡II」1989 江南町教育委員会
- (註9) 「三尻遺跡群庚申塚遺跡・松原遺跡」1987 熊谷市教育委員会

写真図版



1 遺跡群全景



2 遺跡群全景（南から）



1 遺 路 全 景 (航空写真)



2 遺 路 全 景 (北東から)

図版 3 遺跡（大門遺跡東地区）



1 調査区全景（北から）



2 調査区南側遺構分布



1 第1号住居跡全景



2 第2号住居跡全景

図版 5
遺跡（大門遺跡東地区）



1 第3号住居跡全景



2 第4号住居跡全景



1 第1号住居跡土層



2 第1号住居跡カマド



3 第2号住居跡土層



4 第2号住居跡遺物出土状態



5 第3号住居跡土層



6 第3号住居跡石出土状態



7 第4号住居跡土層



8 第4号住居跡カマド



1 第1号土器集中地点（南から）



2 第1号土器集中地点（西から）



1 第2号土器集中地点（北から）



2 第2号土器集中地点（東から）



1 第2号・第3号(奥)土器集中地点



2 坯出土状態



3 瓶出土状態



4 第3号土器集中地点



5 第3号土器集中地点



6 ピット群(南から)



7 第1号溝跡(北東から)



8 表土剥風景



1 調査区全景



2 第3号溝全景



3 第3号溝土層



4 集石造構



5 獨立甕出土状態



1 遺跡全景（航空写真、北から）



2 遺跡全景（航空写真、北東から）



1 A・B地区遠景



2 A地区全景



3 カワラケ



4 カワラケ



5 板 磚



1 第1～3号溝跡



2 玉性寺歴代住職墓地



1 本堂跡(東から)



2 础石



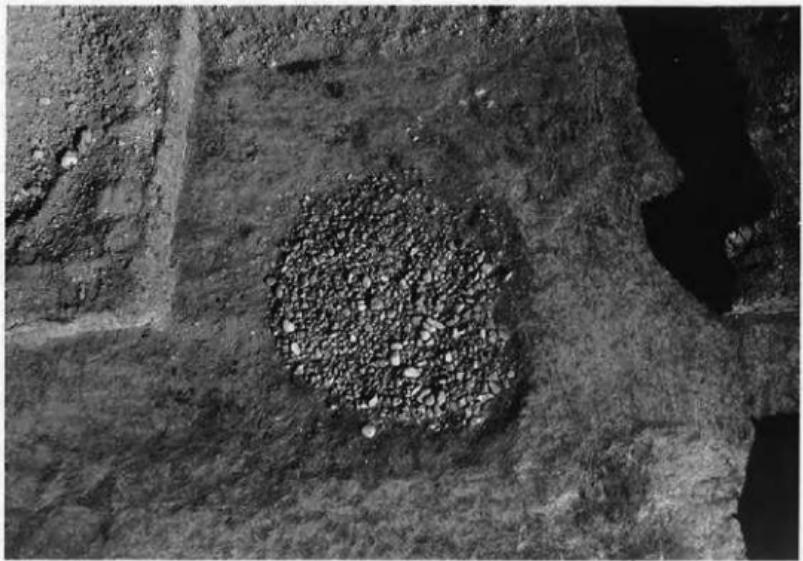
3 础石



4 础石



5 础石断面



1 井戸跡（南から）



2 井戸跡断面



1 瓦捨場



2 瓦捨場堆積狀態



1 瓦捨場堆積状態



2 調査風景



1 調査区全景（北西から）



2 調査区全景（南から）



1 塚遠景



2 第 1 号塚（西から）



1 第1号塚（南から）



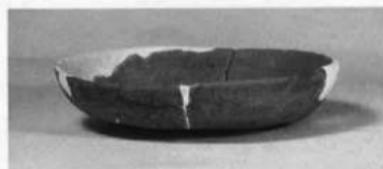
2 第1号塚断面



1 第2号塚（東から）



2 第2号塚断面



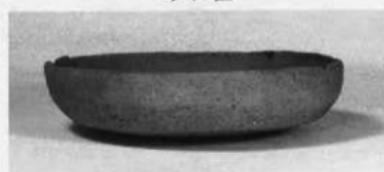
坏（1住）



坏（2住）



坏（1住）



坏（2住）



高台坏（1住）



蓋（2住）



高台坏（1住）



蓋（4住）



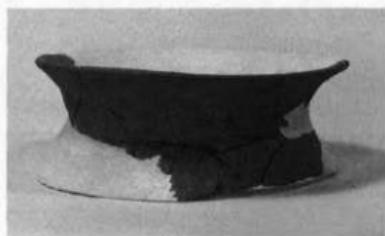
蓋（1住）



（表） 砧石（3住）

（裏）

住居跡出土遺物



甕（1集中）



小形壺（2集中）



甕（1集中）



台付甕（2集中）



甕（1集中）



甕（2集中）

土器集中地点出土遺物



坏（2集中）



坏（2集中）



高台坏（3集中）



高台坏（3集中）



高台坏（3集中）



坏·瓶（2集中）

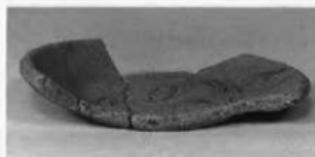


羽口（左上）·铁滓（1清）



单弦瓶（寺西地区）

土器集中地点·溝·寺西地区出土遗物



カワラケ



(上面)



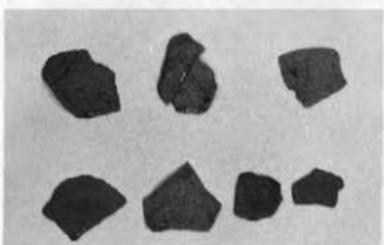
(下面)



カワラケ



カワラケ



カワラケ



陶器類

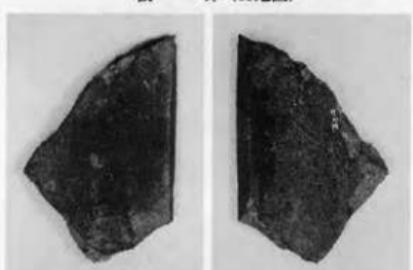
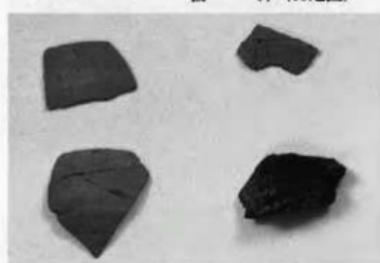


スリ鉢

(内面)

A地区出土遺物

図版 26
遺物（五性寺跡）



A・B・D地区出土遺物



スリ鉢



火鉢・内耳鍋



上白 (上面)



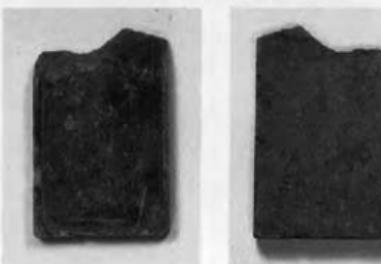
(下面)



下白 (上面)

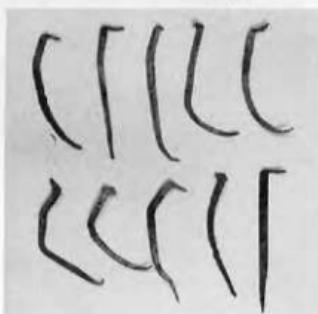


(側面)



瓦 (表)

瓦 (裏)

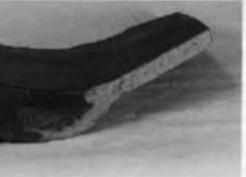


瓦 钉

D地区出土遺物



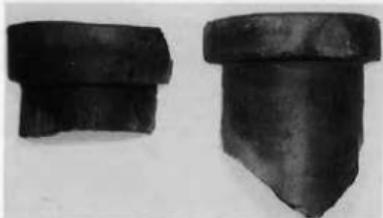
鬼 瓦



軒 平 瓦



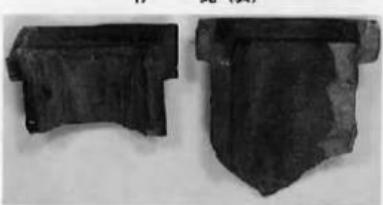
軒 丸 瓦



竹 瓦 (表)



平 瓦



(裏)



竹 瓦 (表)



(裏)

D 地區出土遺物

瀬山遺跡群発掘調査報告書

— 大門遺跡、玉性寺跡、道祖神遺跡・塚 —

平成3年3月25日

編集・発行 川本町教育委員会

埼玉県大里郡川本町大字菅沼1009

印 刷 株式会社 きょうせい
